

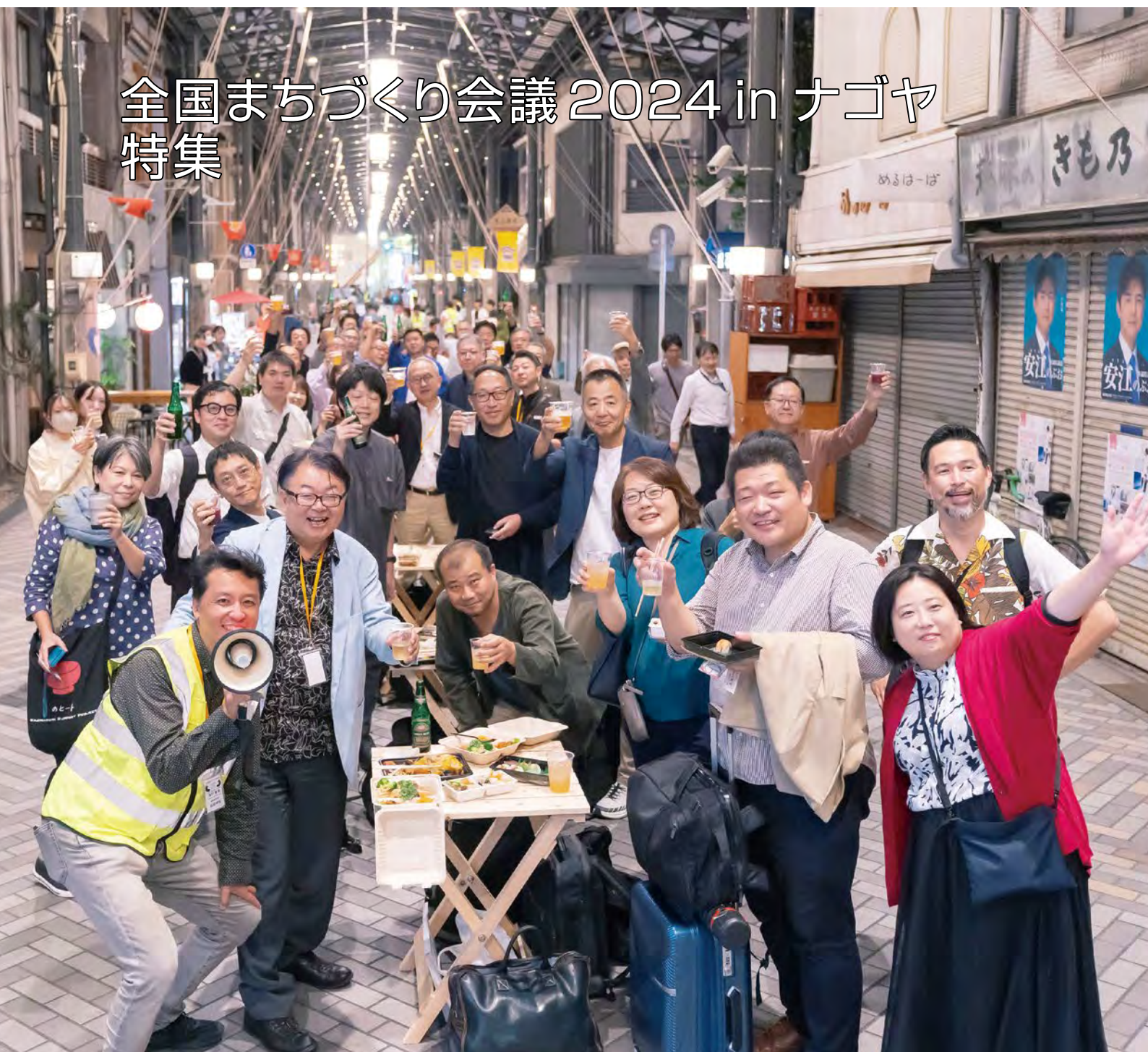
都市計画家

Planners 105

プランナーズ

2025

全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤ 特集



全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤ 特集

3	全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤを開催して	秀島 栄三
4	オープニングトーク1 鼎談会「ナゴヤのまちづくりの行方」	秀島 栄三
7	参加団体・協賛企業・プログラム	
8	オープニングトーク2「ナゴヤのまちづくりー地域主体のエリア再生ー」	森 一将
12	愛知建築士会学生コンペ 2024「建築・まちづくり学生活動報告コンペ」公開二次審査 西田司 氏 記念講演「オンデザインの建築+まちづくり」	恒川 和久
14	全国まちづくり会議 2024 年 ナゴヤ大会プログラム	益尾 孝祐
15	脱炭素社会の実現とエネルギー会社のまちづくりについて	久保 樹央土
16	UR 都市機構のまちづくり	内田 瑛輔・宇佐見 康一
17	全国まちづくり会議 2024in ナゴヤのセッションを終えて	和田 貢
18	もっと知りたい!進化する「逃げ地図」ワールド	金 玖淑
19	地域主体のまちづくり×マチビトキタル	内山 征
20	日常のシーンから読み解くパブリック・ライフ	園田 聡
21	まち全体を実証の場に! なごやまちなか実証「NAGOYA CITY LAB」	鷲見 敏雄
22	まちづくりにつながる空き家・空き店舗リノベーションを考える	永柳 宏
23	都市計画と観光まちづくり:足助の町並みからの問題提起	天野 博之
24	地縁者と志縁者との協働によるまちづくりの「場」の創出	藤澤 徹
25	現代の三大課題「脱炭素×防災・減災×地域の持続性」を解く!	岡 万樹子・加藤 孝明
26	水辺のセッション「水辺の価値を再発見する~ナゴヤの水辺の過去、現在、未来を語る会~」	井村 美里
27	学生たちが那古野で考えたこと	吉元 学
28	エクスカーション①堀川 SUP (五条橋) ツアー	井村 美里
	エクスカーション②地域交流拠点「PALET.NU (パレット・ニュー)」視察ツアー	寺西 功一
29	エクスカーション③地方都市まちづくりの最前線!岡崎市・りたの歩みと QURUWA 巡りツアー	天野 裕
	エクスカーション④錦二丁目まちづくりの表と裏ーエリアマネジメントの現場から	名畑 恵
30	地域交流会~円頓寺商店街との連携	益尾 孝祐
32	全まちの様子~スナップ写真集~	
33	全国まちづくり会議 2025 in さいたまに向けて	鈴木 俊治
34	支部だより	
35	事務局 NEWS	

裏表紙 2024 年 10 月 1 日~ 12 月 31 日協会・会員の動向

全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤを開催して

秀島 栄三

全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤ実行委員会委員長／
名古屋工業大学大学院工学研究科教授

概要

2024年10月12日～13日、なごのキャンパス、伊藤家住宅、ワイナリー COMMONE を会場として「全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤ」（以降、全まちナゴヤと云う）を開催した。文字通り多彩なまちづくりの取り組みが披露され、様々な視点から議論が行われた。結果として全国から数百人に及ぶ参加を得て大成功に終えることができた。

まずもって後援いただいた諸公共団体、協賛いただいた企業、関係各位に深く感謝申し上げたい。

開催に至るまで

全まちナゴヤを実施する話は2023年夏に各方面でまちづくりに関わる有志が錦二丁目「喫茶七番」に集まったことに始まる。認定NPO法人日本都市計画家協会（以降、協会と云う）からは山本俊哉会長、原卓也理事、益尾孝祐理事らが参加し、全国まちづくり会議を名古屋で開催する可能性を模索していた。同時に季刊「造景」で名古屋のまちづくりを特集する企画の話も始まった。しかしながら、この地域に協会会員は少なく、会員ではないメンバーと協会が協同して実行委員会を立ち上げて全まちナゴヤを企画、運営することで話がまとまった。秀島を委員長、恒川和久名古屋大学教授を副委員長、益尾孝祐理事を幹事長とすることとして2023年度に明治大学で開催された全国まちづくり会議に出席し、2024年度はナゴヤで開催することを予告した。

その後、実行委員会、幹事会を幾度か開催して企画を具体化した。企業協賛により参加者無料とする、会場のキャパシティにこだわらない、など非会員にとって慣れないことも多かった。少しずつ会場やプログラム。エクスカーショ企画を固め、「建築・まちづくり学生生活動コンペ」を取り込むこと、円頓寺商店街と共催し、「地域交流会」を開催すること、名古屋都市センターにオープニングセッション後半の企画、実施

を依頼すること等およその骨格が固まったところで何人かの幹事が協賛依頼に回った。諸々がなかなか固まらない中、永柳宏愛知大学特別客員教授に実行委員会に参画いただき、効率的かつきめ細かい諸作業、実行委員の増大を推進していただいた。率直に云ってそのことがなかったら全まちナゴヤは開催できなかっただろう。愛知工業大学、名古屋大学、名古屋工業大学の学生がスタッフとして参加した。特に愛工大の学生は地域交流会用のテーブル・椅子を組み立てるなど多大な貢献を果たした。

会議を終えて

天気にも恵まれ、いずれのセッションも満員またはそれ以上の来場者があり、地域交流会はおおいに盛り上がった。季刊「造景」も会場で頒布された。イベントとしても成功していると言えるが、ナゴヤのまちづくり、都市計画を地元の人々に多面的に知ってもらえたことが最大の成果といえるのではないだろうか。ナゴヤではよくあることだが、まちづくりにしても自分たちとしては普通にやっていて何を他者に示すことがあるだろうか、そう考えるまちづくりプレイヤーも多いと思われる。そうした中で全まちナゴヤは自らのまちナゴヤを再認識する場となった。協会にはまたとない貴重な機会を与えていただいた。ここに謝意を表する。



オープニングトーク1 鼎談会「ナゴヤのまちづくりの行方」

秀島 栄三

名古屋工業大学大学院工学研究科教授

10月12日(土)13:15～15:00、なごのキャンパス体育館にて全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤのオープニングとして「ナゴヤのまちづくりの行方」と題する鼎談を行った。東京大学教授 村山顕人さん、名古屋市住宅都市局担当局長(まちづくり推進担当)坂本敏彦さんに登壇いただき、秀島がコーディネータを務めた。以下に議論の展開をまとめる。(以下敬称略)

秀島：名古屋で初めて開催する“全まち”をナゴヤのまちづくりが新たに踏み出す機会にしたい。このセッションではナゴヤのまちづくりの行く末を考えたい。まず自己紹介かたがた名古屋市のまちづくりにどのように関わったかを聞きたい。

村山：東京大学で都市計画を学び、その後7年半、名古屋大学に在職した。環境学研究科で環境面から都市を考え、集約型まちづくりなどがテーマとなった。錦二丁目のまちづくりに2007年から関与した。



村山顕人氏

坂本：名古屋工業大学を卒業し、市役所でささしまライブ24地区、広小路ルネサンス、金城ふ頭、金山、名駅等の拠点整備などを担当した後、観光文化交流局、環境局を経て住宅都市局に戻り担当局長(まちづくり推進担当)に就任した。未来の子ども達に自信をもって渡せるまちをと考え取り組んできた。環状2号線の一部供用時には暫定整備のため環境対策を先送りする議論も根強かったが、最初から環境対策を徹底した。

広小路ルネサンスでは「車が主役のまちから人が主役のまちへ」を目指した。大高南地区の区画整理を担当した頃は地価下落で事業成立しづらい状況の中、都市計画道路を廃止してイオンを誘致し、新駅を実現できた。金城ふ頭は物流と調和させるための交通処理を実現し、レゴランド計画が実現した。



坂本敏彦氏

秀島：1998年に名古屋工業大学に着任し、2003年頃から堀川に関わってきた。汚れきって背を向けられた堀川をよくする一方で多くの人に関心を持ってもらおうと取り組んできた。そういうこともあって沿岸の円頓寺商店街にも関わった。商店街で2人が博士号を取った。ひとはは景観を、もうひとはまちづくりプロセスを主題にした。

秀島：まちづくりの行く末を考えるために振り返りもきちんとしておきたい。村山さんには特に錦二丁目について詳しく話を伺いたい。



秀島

村山：スライドは環境局作成の環境基本計画である。世界的に環境問題が議論されるなか2010年頃に2050年のビジョンをつくった名古屋はすごいと思った。駅そば生活圏も構想され、環境負荷低減と高齢者社会への対応を模索した。2025年までは人口増加が予想され、増加分を駅そばで受け入れようとするものだった。都市計画マスタープランでは地域別構想はつくらなかったが戦略的まちづくり(行政主導)と地域まちづくり(地域主導)の二本立てとしていた。名古屋大学で設計演習を担当することになったとき、錦二丁目を選定した。当時まちは閑散としていた。縁もできて、まちづくり協議会に参加し、まちづくり構想を作成することになった。地区スケールの街づくり構想を提案したら、やってみようということになった。企画会議を隔週で開催してできあがった。民間財団の資金を使いながら模型をつくるなどして具体的に議論した。都市の木質化プロジェクトも展開し、沿道に多量の木材でファニチャーを設置した。全国でパークレットの社会実験が始まる以前のことである。さらに名古屋市の低炭素モデル事業として認定された。その後、7番地区の再開発が進んだ。エリマネ会社も設立された。

秀島：坂本さんには最近までの名古屋のまちづくりの展開を伺いたい。

坂本：2010年に都市計画マスタープランを策定するときに“地域まちづくり”の考えを取り入れた。これまでに47団体が登録を受けている。

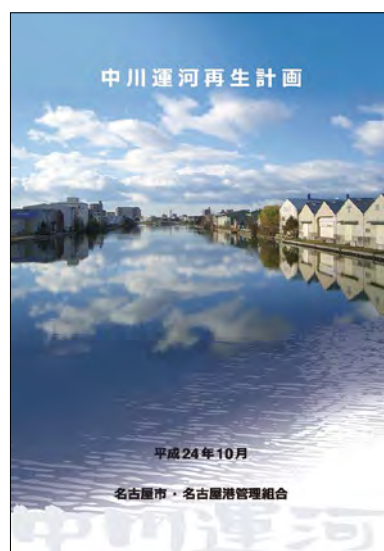
村山：藤巻町も興味深い活動である。こうした長期未整備都市計画公園等がまだある。地域と話あって構

想をつくり一部で都市計画公園を廃止した。

秀島：地域まちづくりは順調に進んでいると思う。地区総合整備事業が源流にあるといえるのではないかな。話は変わるが中川運河についてはおよそ10年前に再生計画をつくり最近その更新版が出た。10年経ってにぎわいゾーンは明らかに変化している。過去を振り返ってこそ次により計画につながると思う。

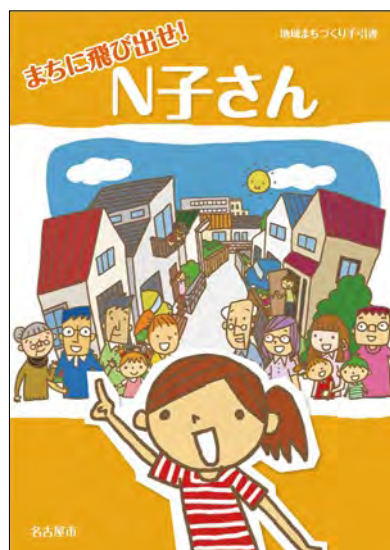
村山：錦二丁目に参加したときレビューをいただいた。議論することが大事だ。

坂本：水辺をどう活かすかを考えてきた。中川運河も金城ふ頭も物流拠点であり元来賑わいはない。新たな施設を入れる必要がある。港明地区は脱炭素先進地区として整備を進めてきた。



3人が策定に関わった中川運河再生計画

秀島：ここからは行く末について話し合いたい。10年先でも考えるににくいことであり、2050年にどうなっているかを考えるのはさらに難しいが、考える価値があると思う。村山さんは環境基本計画などに関与してどう考えてきたか。



地域まちづくり手引き書



松原武久：なごや環境首都宣言～トップランナーは、いま～、ゆいばおと、2006年8月
村山氏スライドより



低炭素都市2050なごや戦略(2009年)



水の復活2050なごや戦略(2009年)



生物多様性2050なごや戦略(2010年)

村山：松原市長時代に3つの2050戦略を見た。生物多様性、低炭素都市、水の環復活である。環境面からも都市計画が考察され、筋が通っていると感じた。

坂本：道路は官が、建物は民が、こういったことをどう調整し、連携していくかが大事と考えてやってきた。民間に動いていただくために誘導が大事だ。Park-PFI制度を適用して久屋大通パークなどが実現している。

秀島：官民連携は進めるべきだが、ある先生がPFIを過度に適用すると質のよい建物がつくられなくなるのではないかと懸念されていた。まったくその通りと思ったが、いかがか。

坂本：新しい制度には色々な課題が出てくると思う。

秀島：制度も成長していくものと捉えられる。このセッションの最後に、まちづくりの中でもっとこうあってほしいといった観点で示唆をいただけるか。

坂本：事例を進めながら制度設計を考えていきたい。みなとアクルスでは東邦ガスと連携して環境面を考慮

したまちづくりを進めていく。ウォークブルなまちを推進するのも一つ。SRT (Smart Roadway Transit : 名古屋市手がける環境や高齢化社会に配慮した新しい交通システム)を来年から走らせる。都心に楽しめる回廊をつくっていく。これらは関係者と話し合いながら進めていく。地域まちづくりとの連携も模索していく。

村山：錦二丁目は2020年にエリアプラットフォームができた。わかりやすいビジョンもできた。いま研究室でも取り扱っている。気候変動への適応の仕方についても研究している。名古屋の現場に関われるのはありがたい。名古屋はインフラがとてもよいということも言っておきたい。インフラが整っていることによって新しいモビリティも早く展開するだろう。

秀島：名古屋のまちづくりはたくさんの経験を積んできた。これからも様々なトライアルをするべきだ。



ステージ全景

全国まちづくり会議

2024 in ナゴヤ

ナゴヤのまちづくりの行方

2024/10/12 sat, 13 sun



2024年10月12日(土)・13日(日)、なごのキャンパスにて開催された全国まちづくり会議の概要は以下のとおりです。

- 主 催：認定NPO法人日本都市計画家協会／全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤ実行委員会
- 共 催：四間道・那古野界限まちづくり協議会／円頓寺商店街振興組合
- 後 援：名古屋市／愛知県／中部地方整備局／名古屋港管理組合／(公財)名古屋まちづくり公社／
(公財)土木学会中部支部／中日新聞社
- 協 力：愛知建築士会
- 会 場：なごのキャンパス／円頓寺商店街／ワイナリー／伊藤家住宅
- プログラム

10/12 土		なごのキャンパス 体育館	
12:30～ 13:00		受 付	
13:00～ 15:00		オープニング1 鼎談会 「ナゴヤのまちづくりの 行方」	
15:30～ 17:30		オープニング2 トークセッション 「ナゴヤのまちづくりー 地域主体のエリア再生ー」	

10/13 日		なごのキャンパス		ワイナリー		伊藤家住宅	
		体育館	ホームルーム	COMMONE 3F		新座敷	奥座敷
10:00～ 12:00		1. ① 駅周辺社会の表現とエネ ルギー会社のまちづくりに ついて ② UR 都市機構のまちづくり	2. 物語のある美しい道徳が 育む郷土愛と豊かな人々 の繋が	5. 日常のシーンから読み解 くパブリック・ライフ		8. 都市計画と観光まちづく りー重伝建造地区 足助を鑑 材としてー	11. 水辺の価値を再発見ーナ ゴヤの水辺の過去、現在、 未来を語る会ー
13:00～ 15:00		学生コンペ 「建築・まちづくり 学生活動コンペ」 公開審査会・記念講 演会	3. もっと知りたい！進化す る「逃げ地」ワールド	6. まち全体を支援の場に！ なごやまちなか実証 「NAGOYA CITY LAB」		9. 地縁者と志縁者との協働に よるまちづくりの「場」の 創出	12. 那古野で学生が考えたこと
15:30～ 17:30			4. 地域主体のまちづくり& マデビトキタル	7. まちづくりにつながる空 き家・空き店舗リノベー ションを考える		10. 現代の三大課題「防災素 × 防災・減災 × 地域の持 続性」を解く！	
17:30～ 18:00			クロージングセッション				

■寄付・協賛企業・団体

鹿島建設株式会社／東京建物株式会社／東邦ガス株式会社／トヨタ不動産株式会社／株式会社日建設計／
日鉄興和不動産株式会社／日本工営都市空間株式会社／野村不動産株式会社／三井不動産株式会社／
三菱地所株式会社／矢作地所株式会社

オープニングトーク2 「ナゴヤのまちづくり-地域主体のエリア再生-」

森 一将

公益財団法人名古屋まちづくり公社名古屋都市センター

企画の趣旨

公益財団法人名古屋まちづくり公社の名古屋都市センター（以下「名古屋都市センター」という）は、名古屋のまちづくりの中間支援的役割を担う組織である。

オープニングトーク2では、「地域まちづくり支援制度」の人材育成を目的とした勉強・交流会企画と「全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤ」の連携企画として、名古屋を中心に活動しているまちづくり団体や事業者、行政の取り組みの紹介とパネルディスカッションを行った。

登壇者は、特色のある活動をしているまちづくり団体等やまちづくりに取り組む行政関係者とし、官と民、所管や事業の垣根を超え、異なる立場・目線でありながら、各者に共通する「エリア再生」「人材育成」のキーワードを軸に、「地域主体のエリア再生」をテーマとして名古屋のまちづくりについて語っていただいた。

企画概要

日 時：2024 年 10 月 12 日（土） 15:30～17:30

場 所：なごのキャンパス体育館

参加者：160名

内 容：第1部「行政関係の取り組み紹介」

第2部 ①「まちづくり団体等による取り組み紹介」

②「パネルディスカッション」

登壇者（敬称略）：

第1部

（公財）名古屋まちづくり公社 名古屋都市センター、経営企画室

名古屋市 住宅都市局ウォークブル・景観推進課、経済局地域商業課

第2部

植村康平（ニシヤマイバショラボ代表）、押村宣広／石原和典（明治・内田橋堀川まちづくり協議会副会長／事務局長）、藤田まや（（株）ナゴノダナバンク代表）、藤田恭兵（（株）On-Co 共同創業者）、

コーディネーター 三矢勝司（名古屋学院大学准教授）



■登壇者詳細

ニシヤマイバショラボ

代表 植村 康平



名古屋市名東区の西山学区を拠点に、イベント等を通じて地域住民同士のコミュニティ形成と街に新たな『居場所(イバショ)』を創ることを目的とし2021年に結成。結成から3年間は名古屋都市センターの活動助成も受け様々な活動を行い、2年目には自分達の拠点となる「暮らせる図書館」をつくり、活動の幅やネットワークを広げる。その後「SiKi design」を結成し、西山のまちを飛び出して「しくみキュレーター」としても活動中。

株式会社ナゴノダナバンク

代表 藤田 まや



通称ナゴバン。「まち」の楽しい！を考え、取り組む会社。空き家・空き店舗対策や古民家リノベーションなどの建築設計・不動産活用をはじめ、イベントやワークショップの企画運営、広報誌のプロデュースなど多角的な視点とアプローチで、魅力ある「まち」を目指した取り組みを行っている。名古屋駅と名古屋城の真ん中あたり、円頓寺商店街がある那古野エリアを拠点に、近年では大阪市や陸前高田市など、全国へと活動の場を広げている。

行政関係者

(公財)名古屋まちづくり公社 名古屋都市センター／経営企画室
名古屋市 住宅都市局ウォーカーブル・景観推進課／経済局地域商業課

明治・内田橋堀川まちづくり協議会

副会長 押村 宣広／事務局長 石原 和典



名古屋市南区北西部の明治・内田橋エリアを中心に活動中。地域まちづくり活動団体(名古屋市登録)。熱田神宮や七里の渡し、堀川、新堀川を活かした回遊性の高いまちづくりを推進し、地域と共に交流・観光・防災拠点を目指している。特に、長年シャッター街だった内田橋商店街はここ一年で新店舗が急増し、年4回のお祭りには毎回数千人が集まり賑わいを見せている。

株式会社 On-Co

共同創業者 藤田 恭兵



ミッションは関わる人々の主体性を向上させ、挑戦が溢れる面白い世の中をつくること。強みは社会に必要と感じた概念を具現化すること。さかさま不動産や丘漁師組合、上回転研究所、madanasasoなどのプロジェクトを展開している。国土交通省まちづくりアワード特別賞、環境省グッドライフアワード環境大臣賞、日本PR協会PRアワードグランプリなど受賞、Forbes Japan など掲載。

コーディネーター | 三矢 勝司

名古屋学院大学現代社会学部准教授



第1部「行政関係の取り組み紹介」

名古屋の行政関係者から、各組織が実施しているエリア再生やまちづくりの人材育成を推進する主な取り組みについて紹介いただいた。

「地域まちづくり支援制度」

(公財)名古屋まちづくり公社名古屋都市センター

松井 慶一郎

地域の自主的なまちづくり活動を継続的・段階的に支援する制度。年間を通し、活動助成やアドバイザー派遣、講座、勉強・交流会などの支援を行っている。

「Poc up スクール NAGOYA」

名古屋市住宅都市局ウォーカーブル・景観推進課 小川 将平

官民のパブリック空間活用による社会実験を通じた地域のまちづくりの担い手発掘・育成を目的とした実践学習型まちづくり講座。後述の(株)On-Co企画運営のもと令和5年度から実施している。今年度は大曽根エリアで行っている。

「エリアリノベーション促進事業」

(公財)名古屋まちづくり公社経営企画室 山田 卓矢

地域の既存建物を、地域の賑わいやコミュニティ活性化に資する場となるようリノベーションし、これをエリア内の連鎖につなげていくことで、エリアの価値向上を目指すもの。現在、那古野、笠寺の2つのエリアで、パッケージ支援を通じた官民連携による遊休不動産の活用に向けて事業の準備をしている。

「ナゴヤ商店街オープン」

名古屋市経済局地域商業課 竹田 真菜

商店街を舞台に行う、空き店舗の再生プラン作成・実践を通じたエリア活性プログラム。過去に対象エリアとして、後述のニシヤマイバショラボと明治・内田橋堀川まちづくり協議会の活動エリアである西山商店街と内田橋商店街においても開催された。ナゴノダナバンクは商店街オープン及び人材育成講座「まちコーディネーター養成講座」の企画運営に携わっている。

第2部①「まちづくり団体等による取り組み紹介」

名古屋を中心に活動されているまちづくり団体等から、それぞれの取り組みについて紹介いただいた。

「ニシヤマイバショラボ」の取り組み

植村 康平

商店街オープンの初年度（2018年）の対象エリアが、居住する名東区西山商店街で開催されたことをきっかけにまちと関わるようになり、商店街オープンのなかで、専門家や参加者たちと事業検討し、西山商店街にもともとあった空き店舗をリノベーションして複合施設「ニシヤマナガヤ」が誕生した。その後、ニシヤマナガヤをきっかけに知り合った3人で「ニシヤマイバショラボ」の取り組みをスタートした。西山商店街の空き店舗を新たに借り、名古屋都市センターの助成も活用しつつ、地域の方が自発的に活動できる場を提供するなど、コミュニティの形成と街に新たな「イバショ」をつくることを目的に活動している。その後もエリア内に地域の方が関われる場所が増え、ここ5年間で緩やかでありつつも濃い成長を続けている。

「明治・内田橋堀川まちづくり協議会」の取り組み

押村 宣広・石原 和典

4年前の内田橋商店街は、近隣の方と挨拶も無いような希薄な関係性のまちだった。2021年からまきわら祭、内田橋まつりを実施し、こういったイベントを通して多くの人が集まり、行政も含めて様々な人に知っていただく機会となった。その様子はメディアにも取り上げられるようになっていったが、これは一過性のものであるため、商店街オープンや地域まちづくり活動団体として、現在はいかに持続的・継続的な取り組みにしていけるかを考えている。最近では、古着好きの学生さんが、高齢者のお宅にお邪魔して掃除やお困りごとを解決する、その対価として古着をいただきリメイクしてイベントなどで販売する。そしてその利益をまちに還元、再投資していく、といった取り組みも生まれた。ここ3、4年で続々とお店がオープンするエリアになってきた。

「(株)ナゴノダナバンク」の取り組み

藤田 まや

円頓寺商店街で空き家・空き店舗対策を取り組んでおり、設計デザイン、不動産仲介、サブリースやク

ラファンによる古民家再生など、さまざまな関わり方で、これまで那古野エリアに約40店舗マッチングしてきた。経営難でつぶれたところは1つもなく、こういった持続的な取り組みを他の商店街にも展開するため、名古屋市が実施する商店街オープンの企画運営を担うこととなった。さらには、大阪からも依頼を受け、市内の商店街の空き店舗対策にも関わるなど広がりを見せている。商店街オープンは、参加することで地域と関わりとっかかりになったり、さまざまな関係者と相談できる、仲間ができる、というように事業者以外の人も関わりしろがあるところが良いところ。また、名古屋でも大阪でも、「まちコーディネーター養成講座」というまちづくりの人材育成講座も行うなど、エリア再生プログラムとして体系化が進んできている。

「(株)On-Co」の取り組み

藤田 恭兵

madanasaso、さかさま不動産、上回転研究所といった、インキュベーションという位置づけのサービスを運営している。それらで生まれたものを地域や社会に実装する役割(=アクセラレーション)を担うPoc upスクールを名古屋市とともにやっている。初年度となる昨年は、名駅3丁目と名古屋港の2つのエリアを舞台に4つのプロジェクトが生まれた。最終的には、地域まちづくり会社入社1名、地域活動の継続参加20名、物件探し1名、法人化検討1組といった成果が生まれた一方で反省点も多くあった。地域まちづくり人材とは何かを改めて考えたとき、エリアに対して自分で理想を持って行動し、実現できる人材だと思っている。学びを通して5年後の地域の顔になるような人材になってほしい。名古屋はもっとインキュベーションとアクセラレーションが連動し、地域に接続できる仕組みがあれば、いっそう各地域が盛り上がるのではないかと感じている。

■第2部②「パネルディスカッション」

第2部の後半は、コーディネーター三矢勝司先生の進行のもと、登壇者とパネルディスカッションを行った。地域が主体のエリア再生について「団体同士や行政との連携について」「資金調達について」「名古屋のまちづくりの特色について」をサブテーマに進行した。

主な発言内容を以下にまとめる。

団体同士や行政との連携について

- ・ 商店街オープンに参加し、成功も失敗も経験した。2年目以降はアドバイザーとして関わらせてもらったが、自身が経験したことを次の参加者に伝えられた。また、自身の活動の幅も広がった。(植村)
- ・ 連携は非常に大切。最初は連携できる相手がいなかったが、活動を通してさまざまな人とのつながりが生まれ、大きな動きにつながっていった。(押村)
- ・ 名古屋都市センターやPoc up スクール、商店街オープンなど、行政はアクセラレーション的な役割を担っている。地域にまちづくりのインキュベーション的な役割をもつ場所、起業家やクリエイターが集まれる場所があると良いと思う。(藤田恭兵)

資金調達について

- ・ たとえばイベントでは、出店者さんからの出店料で回るように、お金を払ってでも参加したいと思えるイベントを企画することに凄く力を入れている。まちづくり初動期は補助があると助かるが、それがないと立ち行かないような取り組みではあまりよくない。株式会社として、まちづくりをベースにした取り組みできちんと稼ぐということにこだわってやっている。(藤田まや)

名古屋のまちづくりの特色について

- ・ こんなところを魅力にしたいな、という話をすると、現在、あるプロジェクトをきっかけに名古屋コーチンを育てることになり、ストリートファニチャーと鳥小屋を足した鳥家具を作り公開空地などに配置している。全国から来た方々が、名古屋

駅を降りたって街を歩いているといろいろな場所に名古屋コーチンがいる、という風景があっても面白いと思う。(藤田恭兵)

- ・ 外から来た人も、2泊3日では感じられないかもしれないが、もう少し長く滞在してもらったら、すごく過ごしやすい街だと思ってもらえると思う。まちにはすでに良いものはあって、熱量のある人がいれば、そのまちの面白さが表現できるようになり、それが魅力的なまちになるのだと思う。(藤田まや)

ディスカッションの終盤で、オープニング1に登壇された村山先生に全体総括的に名古屋のまちづくりについてお尋ねしたところ、インフラを時代に合わせることで、魅力がどんどん高まっていく感じがする。地域まちづくりの支援は、もともと名古屋市で行っていたが、現在は名古屋都市センターに業務が移管し、ますます力強くサポートしている。これからの展開にも期待している、とのコメントをいただいた。

総括

最後に三矢先生から総括として、生活の質がすでに高い都市名古屋にもっと誇りを持つべき、といった指摘の他、充実したインフラを使いこなす市民力があり、団体の共通項として「ほっとするなつかしさ」もある、それが名古屋の魅力だと発言があった。加えて、名古屋ではまちづくりのエコシステムが出来上がっている、といったコメントで締めくくられた。



愛知建築士会学生コンペ 2024 「建築・まちづくり学生生活活動報告コンペ」公開二次審査 西田司 氏 記念講演 「オンデザインの建築+まちづくり」

恒川 和久

全国まちづくり会議 2024 副委員長／名古屋大学教授

建築・まちづくり学生生活活動報告コンペ公開二次審査

毎年、公益社団法人愛知建築士会が行っている学生コンペの二次審査・表彰式と審査委員長・西田司氏による記念講演会が、全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤの開催に合わせた共同企画として、10月13日午後、なごのキャンパス体育館で行われた。

このコンペでは、建築を学ぶ学生が所属する大学の研究室などで取り組んでいるまちづくりに関する様々な活動を募集。一次審査は事前に愛知県内の建築系大学教員9名が審査を担当して実施。9作品が二次審査に向けて選定された。

二次審査の審査員は、委員長に建築家の西田司氏を迎え、県内外の多彩な顔ぶれで実施された。まず9組の学生チームが体育館ステージ上でプレゼンテーションを行い、審査員との質疑応答を行った。取組みは、長期にわたるものから一時的なイベントまで、また大規模なまち全体の取組みから住宅1戸のリノベーションまで、時間も規模も多岐にわたるものであり、これらを同列に評価することに対して審査員たちは頭を悩ませた。各審査員は、課題設定の新規性・明確性や、解決方法の具体性、学生の自主性・主体性など審査での評価視点を表明した上で各作品の講評を行った。その上で各審査員が最優秀・優秀にあたる4作品に投票した結果、ほぼ全員が同じ4作品を選び、全員が同じ作品を最優秀に推すという議論の余地ない全会一致で二次審査は幕を閉じた。

学生コンペ優秀作品の紹介

最優秀案に選ばれたのは、愛知工業大学・益尾研究室による「南海トラフ巨大地震の津波被害想定地域における事前復興まちづくりプロジェクト」。明治大学・山本研究室とともに、三重県尾鷲市三木里地区を対象にした地域住民主体で推進できる「部分改善型事前復興」への取組みである。最大14mの津波が10分程度で到達すると想定される地域で、防災合宿での逃げ地図づくりやワークショップをきっかけに、具体的に実現可能な提案を積み重ね実装化まで繋げていこう

学生コンペ二次審査・審査員

西田 司（審査委員長：東京理科大学准教授、オンデザインパートナーズ）

恒川 和久（名古屋大学大学院教授、一次審査員代表）

市原 正人（市原建築設計事務所、ナゴノダナバンク代表）

長町 志穂（LEM 空間工房代表）

濱田 修（公益社団法人愛知建築士会会長）



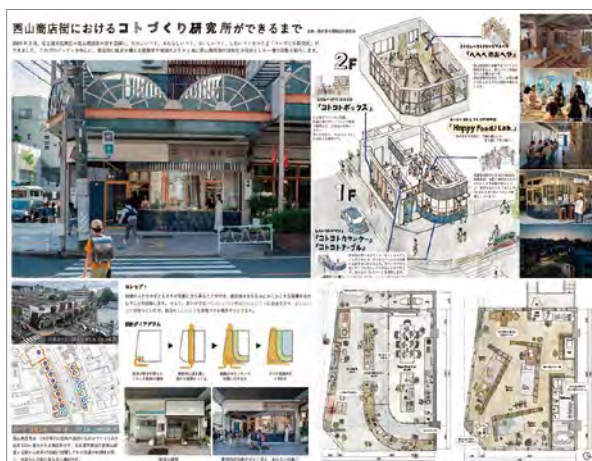
津波被害想定地域における事前復興まちづくり



一つ山荘 絵本サロン 105

とする本格的な取組みである。全国に広げていきたい事前復興のモデルとなり得るものであり、過去の検討の蓄積の上に自分たちの力量を見極めて協働する姿は、審査員一同が感銘を受けるものであった。

優秀案1つめは、名城大学・谷田研究室の「一つ山荘 絵本サロン 105」。築30年の市営団地の1室を、建築学生たちが営む子育て支援スペースとしてリノベーション。高齢化が進む団地に若い子育て世代が訪れる機会をつくるために、学生が絵本サロンを運営し、



西山商店街におけるコトづくり研究所

地域の人との交流を図りコミュニティを広げている。学生が「暮らすように関わっていく」という姿勢や、建物を傷つけないローコストで秘密基地のような空間づくりなど、これからの継続的な展開にも期待したい取り組みである。

優秀案2つめは、椋山女学園大学・橋本研究室による「西山商店街におけるコトづくり研究所ができるまで」。名古屋市郊外・西山商店街の空き店舗に、たのしいコト、おいしいコト、したいコトをつくる「コトづくり研究所」をつくるプロジェクト。商店街に拠点を構える建築家や地域の方とともに商店街の活性化を目的とした一連の活動の一環で、隣接する3つのリノベーションプロジェクトとの回遊性を意識したプランになっている。建築家と協働しながら、学生が自主施工で完成させたもので、地域に喜ばれるのと同時に、プレゼンした本人が何より楽しそうなことが印象的であった。

優秀案3つめは、名城大学の学生による「山添村羊小屋プロジェクト～羊と小屋が作り出す耕作放棄地の新たな風景」。深刻な過疎化が進む奈良県山添村の耕作放棄地に、雑草を食べてもらうことを目的に牧場からレンタルした羊のための小屋をつくるというプロジェクト。雨風がしのげ、2匹の羊が逃げない小さな小屋を、初年度は単管パイプで、翌年度は簡単な木材架構で、いずれもローコストかつセルフビルドで作り出している。限られた材料でリアルな建築としてデザインされ、朴訥な村へのまなざしが心温まる風景を生み出している。



山添村羊小屋プロジェクト

西田司氏 記念講演会「建築を、ひらく～オンデザインの建築まちづくり」

コンペ審査に引き続いて行われた西田司氏の講演では、コンペのテーマを見据え「建築をひらく」ことがまちに働きかけ、まちをひらくことにつながる、多くの試みが紹介された。マスキングテープを路上に張り巡らせ座り込める場をつくったり、自らの事務所を所員たちの思いがけない発案に委ねて開放したり、週末だけ副業する小商いのスペースをまちの隙間スペースに仕込んだりと、楽しげにまちに働きかける実験的なプロジェクトの数々。プライベートが集まる環境がパブリックな場をつくることとして、1人や2、3人が居られるリビングを重ねた大学の寮や、企業が提供するだけでも無料で使える公共的なワークスペースのプロジェクトでは、建築空間として人が混じり合う開かれた場を実現している。こうして出会った様々な人々との対話から、どういう楽しみ方があるか、どういう面白がり方があるか、多様なアイデアをもちより、まちと建築と一緒に構想するという。楽しみながら建築をひらいていくことが、まちづくりにつながるということを実感できる有意義な講演であった。



西田司先生講演風景

全国まちづくり会議2024年 ナゴヤ大会プログラム

益尾 孝祐

JSURP理事／全まち2024 実行委員／愛知工業大学准教授

まちを舞台にした全まち

2024年10月12・13日（土・日）の2日間、全国まちづくり会議2024 in ナゴヤを開催した。会場として、名古屋駅近傍でエリアリノベーションが進んでいる円頓寺商店街及び歴史的町並みが残る那古野地区を選定し、まちを舞台に開催した。廃小学校をリノベーションした「なごのキャンパス」の体育館やホームルームをメイン会場とし、ワイナリーに併設された貸会議室、名古屋市指定文化財である伊藤家住宅など、多種多様な会場を用意した。（図1：全まち会場地図）

会場の特色と合わせた全まち

1日目は、メイン会場である体育館において「ナゴヤのまちづくりの行方」、「ナゴヤのまちづくりー地域主体のエリア再生ー」のナゴヤで展開するまちづくりを中心に2つのオープニングセッションを開催した。2日目は、3つの会場に分かれ、会場の特色に応じて全12のセッションを開催した。ホームルームでは、現代のまちづくりの重要テーマとして、脱炭素と再エネ、景観、逃げ地図、まちづくりの担い手などについて、ワイナリー会場では、プレイスメイキング、スタートアップ、エリアリノベーションなどについて、市指定文化財である伊藤家住宅の会場では、観光、水辺活用、歴史、防災などのセッションが開催された。

商店街と連携した全まち

全まちナゴヤでは、JSURP、全まちナゴヤ実行委員会と共に、円頓寺商店街振興組合との共催で開催した。商店街と連携した地域交流会では、既存の鉄骨フレームを活かしてリニューアルされた魅力的なアーケードの下、道路中心にテーブルを設置し、商店街の店舗と連携したオープンバル形式で開催した。

大学と連携した全まち

全まちナゴヤでは、地元名古屋の多くの大学と連携して開催した。2日目のなごのキャンパス体育館を会場に、愛知建築士会の協力のもと、建築・まちづくり学生活動コンペが開催された。多くの建築・まちづくりを学ぶ学生が取り組む、様々な活動が報告された。

多種多様なエクスカーショ

エクスカーションでは、円頓寺商店街のアーケードの下開催された逃げ地図体験会、堀川SUPツアー、中川運河の地域交流拠点PALET.NU 視察ツアー、岡崎市QURUWA巡りツアー、錦二丁目のエリアマネジメントツアーなど、名古屋及び愛知県で進む、多種多様なエクスカーションが開催された。

雑誌「造景」における名古屋特集との連携

全まちナゴヤに先立ち、雑誌「造景」にて名古屋再生まちづくり特集を組み全まちの企画準備を推進した。

会場

なごのキャンパス
名古屋市西区那古野 2-14-1

- 円頓寺商店街
- ワイナリー
- 伊藤家住宅



伊藤家住宅



図1 全まち会場地図



なごのキャンパス



円頓寺商店街

脱炭素社会の実現と エネルギー会社のまちづくりについて

久保 樹央土

東邦ガスエナジーエンジニアリング株式会社

1. セッション概要

今年は初めての名古屋開催で、大会テーマが「ナゴヤのまちづくりの行方」ということで、地元名古屋のまちづくりに係わる企業として参加させて頂きました。

本セッションでは、エネルギー会社としてまちづくりを進める上で避けては通れない「カーボンニュートラル」をテーマとして、名古屋のまちづくりの“これまで”と“これから”を知っていただくことを目的に以下の内容についてプレゼンテーションを行いました。

(1) カーボンニュートラルに向けた先進技術

水素サプライチェーン、メタネーション、再エネ発電の利活用等、カーボンニュートラルな社会の実現を目指して東邦ガスグループが進める先進的な取り組みについてのご紹介

(2) エネルギーの面的利用

省エネ性や防災性のメリットを有し、都心部のまちづくりにおいて普及拡大が進む「地域熱供給」について、名古屋市（名駅・栄エリア）での導入状況や、他地域における先進事例のご紹介



(3) 事例紹介「みなとアクルス」

名古屋市と東邦ガス等の共同事業として「脱炭素先行地域」に採択された「みなとアクルス」の開発概要と将来展開についてのご紹介



2. 当日の様子

当日は、なごのキャンパス体育館の一画をお借りして、1時間弱のプレゼンとパネル出展を行い、約30名程度の方にご参加頂きました。

一部の方にとっては、エネルギー会社に取り組むまちづくりは馴染みが無い分野だったかもしれませんが、興味を持って弊社のセッションにご参加いただいたことに心より感謝申し上げます。

参加者さまからは、特にカーボンニュートラルなまちづくりにおける水素や再エネの活用について関心が高いことが伺えました。セッション中や終了後のアンケートにおいても多くのご質問・ご意見を頂くことができ、弊社にとっても学びが多く大変貴重な機会となりました。また、弊社のセッションを通して、ご参加いただいた方にとっても新たな気づきや学びが少しでもありましたら幸いです。



3. 全国まちづくり会議への参加を通して

2日間の『全まち』を通して、東邦ガスグループからはまちづくりに携わる部署から計7名が参加し、様々なセッションへの参加・聴講を通して、まちづくりのプロフェッショナルの皆様から大変貴重なお話をお伺いすることができました。改めて『全まち』実行委員の皆様、および参加者の皆様にお礼申し上げます。

東邦ガスグループは今後も、エネルギー会社として、そして地域に根ざした地元名古屋の企業として、「ナゴヤのまちづくり」をより良いものにするために微力ながら尽力させて頂きますので、皆様にも引き続きのご支援をよろしくお願い致します。

UR都市機構のまちづくり

内田 瑛輔独立行政法人都市再生機構
都市再生部企画課主幹**宇佐見 康一**独立行政法人都市再生機構
中部支社都市再生業務部
担当課長

1. UR都市機構のまちづくり

独立行政法人都市再生機構（UR都市機構）は、平成16年に都市基盤整備公団と地域振興整備公団の統合により、国土交通省所管の政策実施機関として設立された。「都市再生」「賃貸住宅」「災害復興」に係る業務を実施しており、今回の全国まちづくり会議2024 in ナゴヤではまちづくりをテーマとしていることから、「都市再生」と「災害復興」の取組み事例についてパネルで紹介した。

2. ナゴヤでのまちづくり

① sanagi プロジェクト

ナゴヤでのまちづくりとして、UR都市機構中部支社が行うsanagiプロジェクトをパネル展示した。sanagiプロジェクトは、名古屋市がリニア駅上部に計画している広場を中心としたまちづくりを進めている名駅三丁目において、まちにあるべき機能や活動、名古屋駅周辺に不足する日常的に滞留できる空間、魅力ある地域資源となっている那古野（円頓寺商店街・四間道等）への回遊促進等をUR所有地を使って小さく実践しながら、まちの将来を考えるプロジェクトである。

多くの来場者にパネルの前で足を止めていただいた光景からも、名古屋駅周辺のまちづくりに対する期待の高さを再認識することができた。

② トークセッション「名駅三丁目のこれから」

また、トークセッションでは、横浜関内等でまちづくりを実践されている西田司氏（株式会社オンデザインパートナーズ代表、東京理科大学創域理工学部准教授）、那古野で活躍しsanagiプロジェクトに関わっている市原正人氏（株式会社ナゴノダナバンク代表取締役）、藤田まや氏（同 代表取締役）をゲストに招き、UR都市機構中部支社 都市再生業務部担当課長 宇佐見康一を交えて「名駅三丁目のこれから」をテーマにトークを展開した。

トークの中では、「異なる職種の人たちをコミュニティの核として巻き込んでいながら、それぞれのプ

レイスメイキングを行ない、それらの記憶を積みあげていくと良いのではないか」（西田氏）、「一つ屋根の下で商売をするような関係性が名駅三丁目でも必要。活動を通じてまちに関わる人たちの誇りが生まれると良い」（市原氏）、「地域に根差して活動する人がいない名駅三丁目エリアで、まちに関わる人を増やすのは初の試み。楽しく活動しないと関わってくれる人が増えないと思っている」（藤田氏）など活発な意見が交わされた。

3連休の中日の午前ということで当初定員20名を想定していたが、結果として40名超が来場し、質疑応答も交わされ、時間が不足するほどの盛況ぶりとなった。

3. 今後に向けて

今回のトークセッションにおいて、来場者から「ナゴノダナバンクのような地域のプレイヤーが必要と感じた」「URもソフト面での取組みが増えてきた」といった意見をいただいた。名駅三丁目でのまちづくりを発信する機会とすることができ、また、今後もsanagiプロジェクトを通じて地域のプレイヤーとなる方々とともに名駅三丁目におけるまちの将来像を創っていく必要性を改めて認識する場とすることができた。



全国まちづくり会議2024 in ナゴヤのセッションを終えて

和田 貢

日本屋根外装工事協会／歴まち保存研究部会 部会長／
株式会社和田商店

日本屋根外装工事協会として全まちのセッションに久しぶりに参加させていただいたことに、JSURPの皆様には心より御礼を申し上げます。

我々は日ごろ、日本の景観を取り戻すために、歴史的な町並みなどを研究し、どのようにアプローチをしていくかなどを考え活動しています。

今回は大栄窯業株式会社代表・道上大輔氏を講師に迎え講演を行いました。同氏は、20年に亘り、モノづくりの観点から、町並みの重要性までを訴え続けています。

講演では、

・日本と世界の景観比較

ヨーロッパなどの世界遺産がなぜ続いているのか。日本の景観美はなぜ失われたのか。この違いを理解することで、日本の景観が持つ価値を再認識できると同時に、他国の景観からも学ぶべきことが多い。

・失ったものの価値

現代社会では、便利さを追求するあまり、失われてしまったものが多くあります。伝統的な手仕事や地域の風習、などは、都市化やグローバル化の進展とともに消えつつあります。しかし、これらの「失ったもの」は、私たちの文化的アイデンティティや地域コミュニティの基盤を形成しています。再評価することで、それらの価値を次世代に伝えていくことが重要であります。

・瓦は本当にオワコンなのか？

近年、瓦の使用が減少していますが、果たして瓦は本当に「オワコン」なのでしょう。瓦は、優れた耐久性や断熱性、さらには美しいデザイン性を持つ素材です。地域によっては、伝統的な技術を生かした瓦屋根が評価され、観光資源にもなっています。瓦の価値を再認識し、適切な方法でその魅力を伝えることが、今の課題です。また 1400 年続く瓦は本当の意味で持続可能な物でもあります。

・景観が我々にもたらす影響

美しい景観は戦争抑止にもなり、人格形成も進む。天才と呼ばれる人や事業で大成功を収めた人も素晴ら

しい景観の中育った人が多い。

このような点がある事も多くの方々に伝えていかなければならない。

このように同氏は講演を締めくくった。



その後は、当会顧問の坪井進悟氏主導による能登地震などの現状と対策についてもセッションを行った。



我々としては、時間配分の都合から、質疑の時間が取れなかったこと。三連休で商店街に、にぎわいはあったが、なごのキャンパスまで全まちを觀にくる人が少なかったのは広報力の点からも反省点であった。しかし、数名の方々にでも景観の重要性を伝える事が出来たのは収穫があったと考える。

今後も日本の景観復活の為に、様々な機会を通し、景観の重要性を伝えていきたい。

もっと知りたい！進化する「逃げ地図」ワールド

金 玖淑

JSURP 理事／逃げ地図研究会／
日本ミクニヤ株式会社／京都大学防災研究所

1. セッションの趣旨

本セッションは、昨年 JSURP の部会として発足した逃げ地図研究会が「逃げ地図」づくりの普及啓発のために企画したものである。

「逃げ地図」は、安全な場所（避難目標地点）までの避難距離に対して移動にどのくらい時間がかかるかを時間ごとに色分けし可視化することで、避難できるかどうかシミュレーションするツールである。基本的な考え方は後期高齢者が傾斜度 10 度の坂道でも徒歩で 3 分間 129 m 移動できるという設定になっている。基本的なことができるようになると、道路の閉鎖や避難する人の条件（避難時間帯、避難速度）等を変えつつ多様なシミュレーション結果を踏まえて地域に必要な防災対策や今後のまちづくりについての話し合いのツールとしても活用することができる。

2. セッションの実施報告

セッションは 10 月 13 日午後になごのキャンパスのホームルームで開催し、大学、行政、建築・まちづくりに携わっている民間企業等から約 30 名が参加した。

まず、明治大学の山本俊哉教授（JSURP 会長、逃げ地図研究会代表）が逃げ地図について説明を行った後、今まで通りの紙上での「逃げ地図」づくりの体験会に加えて、Web 上でも逃げ地図づくりができるように開発されている「逃げシルベ」の体験会、今年からスタートした「防災逃げ地図士」の資格制度（3 級：普及啓発者、2 級：ファシリテーター、1 級：講師）のご案内、「逃げ地図」から広がる展開として三重県尾鷲市三木里地区での取組み紹介や「ふくい逃げ地図研究会」の立ち上げと今後の活動に関するご紹介があった。最後に、早稲田大学の矢口哲也教授（JSURP 理事、逃げ地図研究会）から「逃げ地図研究会は交流のプラットフォームであること」や「地図の種類は多いが、逃げ地図は住民の視点からの地図づくりであること」を強調した上でセッションを終了した。



写真 1：「防災逃げ地図士」の認定制度の説明



写真 2：WEB版「逃げシルベ」の体験会



写真 3：アーケード街での逃げ地図づくり体験会（本セッション以外にも 10 月 12 日には円頓寺商店街のアーケード街でエクスカッションの一環として「逃げ地図」づくり体験会と活用ワークショップを開催）

地域主体のまちづくり×マチビトキタル

内山 征

JSURP 理事／株式会社アルメック

近年、官民連携まちづくり、地域主体のまちづくりという言葉が目立ちます。これは我が国の都市が“つくる時代”から、“つかう時代”に移り変わり、使い手の住民や地位団体、企業等がまちづくりに主体的に取り組むようになった現れだと思っています。

JSURPでは、設立以来、全国の“草の根まちづくり”の交流と支援を進めてきました。近年は、地域主体のまちづくり推進事業として、国土交通省の官民連携まちなか再生推進事業の補助を受けて取り組みを進めています。JSURPでは、まちづくりに取り組む方々に、まちづくりの情報や経験、人的ネットワークを共有していきたいと考えております。

今回、プログラムは、大きく2つに分けて、情報提供や意見交換を行いました。



プログラム1 全国のまちづくり事例の紹介

前半は、全国の担い手の方々に、地域主体のまちづくりの事例を紹介していただきました。

- ・鹿沼市における歴史文化を活用した地域再生への取組
- ・薩摩川内市での水辺のSOKO KAKAKA
- ・輪島市門前のまちづくり・復興
- ・浜松市での私設図書館

まちづくりのきっかけ、人材等、様々な要因のもとで、まちづくりが生まれ、多様な効果を生み出しています。今後も地域主体のまちづくりの情報を得て、まちづくりに取り組む方々の支援をしていくことを考えております。

プログラム2 マチビトキタルを知っていますか？

マチビトキタルは、都市やまちづくりに関するプロジェクトと、そのプロジェクトに参画したい人々とを繋げるプラットフォームで、臂理事や高野理事をはじめ、

複数のJSURP会員が関わっています。

今回のプログラムでは、まちづくりを担い手（コーディネーター、プロデューサー）の人材に着目し、役割と収入を両立させながら、地域に定着する方法論について、パネラーが考えを出し、参加者と意見交換をしました。



臂徹理事からのコメント

商店街活性化や再開発など、プロジェクトを性質で分類することはできても、地域を取り巻く環境は異なるため、担い手の役割まで普遍化することは困難です。

ハートビートプランの泉英明さんからも「面白い取り組み。コーディネーターやプロデューサーは本来、地域の取り纏め役が担うべきであるが、そうなれない地域も多い。2つの違いはあまりなく、場所やフェーズによって変わるもの」という助言をいただきました。

総括コメントを依頼した弘前大学特任教授の北原啓司先生からは「プロデューサーは前を見て進み、コーディネーターは横や後ろを見ながら進む。どちらも大切だが、いま求められるのはプレイヤーとしてのスピリッツとリスクを負う覚悟をもったプレイングマネージャーである。」という重要なメッセージをいただき、担い手の人格や行動特性までも追求する、難しい課題と向き合っていると痛感するとともに、取り組みの真価と進化が問われていることを深く認識しました。

次年度の全国まちづくり会議においても、今回の続きの意見交換ができればと考えております。

日常のシーンから読み解くパブリック・ライフ

園田 聡

JSURP 理事／有限会社ハートビートプラン

1. 研究会の趣旨

本セッションは今年度から JSURP の研究会として活動しているパブリック・ライフ研究会が企画・主催したトーク企画である。研究会のメンバーは JSURP 会員を軸に会員外の方も含めた 20 代後半～40 代までの世代であり、都市コンサルのみならず建築家やプロダクト・デザイナー、デベロッパーや土木デザイナーなど多様である。

この研究会では、現代のまちづくりにおいては計画論のみならず結果として立ち現れる暮らしのシーンを具体的に提示し、幅広い関係者と共有することの重要性が増しているにもかかわらず、そのシーンのあり方やそれを適切に言語化・表現し、共有するための理論や手法は一部の専門分野での認知に留まっていることに課題意識を持っている。その解決を目指す取り組みの一環として今回のセッションを開催した。

2. 当日の議論

本セッションは、研究会メンバーから上田孝明氏（メメント）、勝亦優祐氏（株式会社勝亦丸山建築計画）、右田萌氏（シェアードビジョン）が登壇し、ゲストとして加納実久氏（新とよパーク・パートナーズ代表）を迎え、研究会の代表として私がコーディネイトする形で進行した。研究会の活動紹介に続くクロストークでは、ゲストの加納氏から紹介いただいた愛知県豊田市のまちなか広場「新とよパーク」における自由と責任に基づく自由度の高い広場運営（スケートボードや焚き火などが届出不要の自由使用としてできる）と、それによって生まれている豊かな暮らしのシーンを軸に議論が展開された。議論の中では主に以下のような論点が見出され、それぞれの切り口に関して現場でのリアルなエピソードを伴いながら意見が交わされた。

①豊かなシーンが生まれる背景には、シーンを生む要素としての空間デザインや周囲との関係性がある。

②それらの要素を支える仕組みとしての運営管理の工

夫があり、そこでは行政と民間、利用者と地域の間で無理のない連携が行われている。

③そしてその仕組みを機能させているのは、結局のところパブリック・マインドを持った個人であり、立場を超えてそうした人同士が結びつくことで、多様なパブリック・ライフが生まれる土台ができる。

パブリック・ライフというのは主に公共的な空間に立ち現れる人々の日々の営みやアクティビティを指すが、豊かなパブリック・ライフが都市に表出する際には上記のようないくつかの階層ごとにその成立要因があることが明示された。そして、それらが適切に積み重なって初めて豊かなシーンが成立するとすれば、その手法とプロセスを確立することが都市プランナーのミッションであると言えるが、仕組みだけを構築するだけでは不完全であり、最終的にはそこに地域に根差したパブリック・マインドを持った人が関わり続けることが必要不可欠であることも同時に指摘された。

3. 今後に向けて

今回の議論で見えてきたパブリック・ライフの本質を私たちが正しく理解し、それぞれの職能を通してそうしたシーンを生み出していくことができれば、日本の都市はより楽しいものになっていくに違いない。



まち全体を実証の場に！ なごやまちなか実証「NAGOYA CITY LAB」

鷲見 敏雄

名古屋市経済局イノベーション推進部
スタートアップ支援課課長

1 セッション開催の趣旨

名古屋市では令和5年度から新たにまち全体を実証の場にしていく「NAGOYA CITY LAB」の取り組みを進めています。このプログラムは、多くの企業やまちづくり団体が主体的に参加し、新しい名古屋のまちをスタートアップとともに創り出そうという、全国的にも新しい取り組みです。

今回、「ナゴヤのまちづくりの行方」というテーマにまさに合致する取り組みとして、行政、企業・まちづくり団体、スタートアップが連携した当該取り組みを紹介し、全国にこの流れを広げるとともに、持続的かつ効果的な取り組みとしていくため、実証の成果やスタートアップとの共創の意義について議論しました。

2 当日の議論

登壇者としてまちづくり団体から、円頓寺商店街の田尾氏と錦二丁目エリアマネジメント株式会社の白石氏、企業からは名古屋鉄道株式会社の佐藤氏、スタートアップからは、株式会社アイデアブルワークス代表の寺本氏、そして、名古屋市で客員起業家として本プロジェクトに取り組む、スタートアップ創業経験者の加藤氏をお迎えし、奇しくも R5 年度の実証プロジェクトでも活用したワイナリーにおいて、パネルディスカッション形式で熱く議論しました。



議論は、「なぜスタートアップとの共創にチャレンジしたのか」、「実証を通じた成果とは」といったテーマを中心に進行しました。

まちづくりにおける時間的制約や資金面などのジ

レンマといったリアルな声もお話いただきながら、そういった中でのスタートアップとの共創の必要性についても言及いただきました。

また、実証を通じた成果として、まちづくり団体や企業側からは、これまで漠然としていた課題が明確化され、次にすべきことが見えてきたとのこと、スタートアップからは、実証を通じてもともと想定していたニーズではない、新たなニーズに気づくことができたとのことで、本実証により「新たな気づき」を得られたという共通した成果をお話いただきました。

当該取り組みを通して、タイトなスケジュールや様々な法規制、未知のスタートアップとの共創など、取り組みにおける大変さは数多くあったものの、課題が明確化したり、自身の取り組みに賛同してくれる人がいることに気付けるなど、今後の活動への大きな一歩を踏み出せたようで、参加した各主体にとって、とても有意義な事業にできたことが再認識できました。また、最後には、事業をより良くするためにはどうすればよいか意見を出し合い、今後の事業方針を見つめなおすいい機会となりました。

3 議論を終えて

今後、継続的かつ効果的な活動としていくためにも、それぞれにとってのメリットをより高くできるか、スタートアップの成長のための効果的なスキームをどうつくっていけるかということが重要になってきます。今回、パネルディスカッションを通して、それぞれの主体にとってどのようなメリットや狙いがあったか、またどういった課題があるかということが、分かってきました。今後、さらなる効果的な事業展開に向けた検討を進めていく、大きな材料になったと思います。

また、セッションには席に座り切れないほど多くの方にご参加いただき、その中には、うなずいたりメモを取ったりする姿が見られました。今回のまちづくり会議を通して、こうした取り組みが全国に広がっていく良い機会になったのではないかと思います。

全国まちづくり会議参加セッション

まちづくりにつながる空き家・空き店舗
リノベーションを考える

永柳 宏

愛知大学特別客員教授／愛知淑徳大学非常勤講師

地方都市において、空き家・空き店舗を活用したまちづくりが注目されています。個店・個人の取組みを超えて、まちづくりに連動していくためには、どのような取組みが必要になるのか？本セッションでは、建築・まちづくり・地域政策を学ぶ学生達と、まちづくりリーダーとの垣根のない幅広い対話を通して、空き家・空き店舗の可能性と課題を考える企画であり、約50名の参加のもと開催されました。趣旨説明(永柳)のあと、第1部では、三矢勝司氏(名古屋学院大学 准教授)の進行にて3人のまちづくりリーダーからのプレゼンテーションが行われ、第2部では、愛知淑徳大学学生司会(中島4年、赤田3年)のもと活発な意見交換が行われました。

第1部 まちづくりリーダーの取組み 3事例

①かさでらのまち食堂 宮本 久美子氏

(かさでらのまち食堂 / かさでらのまち編集室)

“よ・し・お”(よ)余白、(し)新陳代謝、(お)応援の3つの頭文字で表現したまちづくりキーワードのもと、笠寺観音商店街(愛知県名古屋市南区)にて、空き店舗活用で展開されているシェア型食堂「かさでらのまち食堂」、シェア型図書館やアンテナショップから構成される「かさでらのまち箱」、情報発信型のシェア空間(カフェスタンド、デザインセンター等)「かさでらのまち」等の自身がプロデュースされたプロジェクトの解説をいただきました。いずれのプロジェクトも、企画段階から、住民や学生を巻き込み、実証実験やワークショップを重ねる取組みがあったことをお話いただきました。また設計・デザインにあたって、小さい店舗を逆手にとって、家族的な雰囲気のある空間づくりとしたコンセプトをご紹介いただきました。

② Empty Space 田原 由紀子氏(きそがわ日和)

中山道太田宿(岐阜県美濃加茂市)の町屋をリノベーションしたアールスペース「Empty Space」と開設までのみちのりについて、自身のキャリア、まちとのであい、アートプロジェクト「きそがわ日和」の開催実績とあわせてお話をいただきました。芸術祭型で始まったアートプロジェクトが、回数を重ねるなかで、地域の子供たちへのワークショップやアーティストインレ

ジデンスへと熟成され、ギャラリー、ブティック、本屋、キッチン等といった複数の町屋リノベーションにつながっていく、まちづくりの時間軸が紹介されました。

③生活者視点での建築 / 家守活動 畑 克敏氏

(studio36 代表)

岡崎城や乙川沿いを含む岡崎市中心市街地のまちづくりを、公民連携で取り組んでいるQURUWA 戦略のなかで、自身が主宰するstudio36で手掛けた複数のプロジェクトをご紹介いただきました。QURUWA戦略の最大の特徴は、「大きなリノベーション(都市デザインによる回遊づくり)」と「小さなリノベーション(空き店舗等のデザイン)」が融合している点をあげられ、地域に立脚する建築事務所の役割として「生活者」視点の重要性を強調されました。とりわけマンションや駐車場への土地活用への動きが活発な中心市街地であって、空き屋情報等への早いアプローチも大切あり、地縁組織との信頼関係構築の重要性と建築家の心構えをお話いただきました。

第2部 学生との意見交換・総括

学生からは、大学を卒業してからも、どのように、まちづくりに参加し、関わっていけば良いのかという質問が投げかけられ、まちづくりリーダーからキャリアを踏まえた様々なアドバイスがありました。生活者としての参加、職業や職能を前提とした参加等の様々なタイプが示され、若い学生にとっても有意義な意見交換の機会になりました。セッションは、三矢勝司氏から3事例に共通する取組みのポイントを総括いただき盛況のうちに閉会をしました。



photo by aizawa

都市計画と観光まちづくり：足助の町並みからの問題提起

天野 博之

地域人文化学研究所

はじめに

セッション8「都市計画と観光まちづくり－重伝建地区 足助を題材にして－」は、歴史的な町並みの保全と観光活用について、観光と都市計画双方の視点から議論する場として企画された。司会は計量研究所の石川岳男氏が務められ、筆者が話題提供、福山市立大学教授の岡辺重雄氏が論点整理、法政大学准教授の西川亮氏が事例紹介を行った。

概要報告

まず話題提供として、足助の町並みを「住み継ぐ」ための新たな価値を提案する「寿々家再生プロジェクト」の活動と、観光面から捉えた町並みの現状や課題が紹介された。また観光面だけでなく、歴史的な町並みの保存と活用に関する問題提起として、地域住民による町並みの活用という内発的な視点から、様々な変化の時間軸の差異の存在と新たな価値の共有の困難さなどが挙げられた。そしてより根本的な課題として人口減少への適応も提示された。

論点整理では、鞆の浦の事例などから、文化財の網掛けと生活区域の範囲が異なる場合など歴史的町並みの保存に関する課題や、外部との交流に対する町並みの観光活用の課題が示され、足助については観光に対する受け入れ姿勢や町並み施設の印象などが述べられた。さらに、新しい価値観をどのように作るのか、人口減少の中で今をどれだけ頑張れるかが大事との示唆があった。

事例紹介としては、矢掛の町並みにおける分散型宿泊施設の取組や、妻籠・馬籠を例に、インバウンド対応において日本人とは異なる視点で地域の価値を伝える必要性などが語られた。また、関係人口や移住者の活動が観光や暮らしへ及ぼす影響や、町並みの観光利用が地元の生業や生活空間を奪う危険性、観光と生活の共存には地元の人が使えるような施設整備が重要、との指摘があった。

その後、登壇者の意見交換や質疑応答も盛り上がり、人口減少を前提に観光を生かして町並みを残す方策や、暮らしを守るために観光は寄与できるのか、の論点について、概ね以下の見解が示された。

・歴史的な町並みの保存は、そこに住む人の暮らしがな

ければ継続が困難

- ・人口減少への対応は、世代交代の進め方が鍵となる
- ・観光等の受け入れには一定の条件（地元理解の促進等）を設けることが望ましい
- ・地元の人が楽しめる町に観光客が来ることが理想
- ・町並みの維持を生活の質の向上につなげる視点が必要
- ・地元の人がまちづくりの方向性を選択すること、またそれに至るプロセスが重要



足助の町並みからの問題提起補足

筆者は、行政の都市計画的な町並み整備に対抗して、重伝建選定への道筋をつけた町並み保存運動を陰で主導し、その義理と人情で、寿々家再生プロジェクトに取り組んでいる。その現場感覚から、足助における重伝建の意義や景観保全の仕組み、土地柄など、多面的な事象を話題提供に詰め込んだ。セッションの企画の範囲を超えた問題提起もあったと思うが、あえてそれらを提示した考えを3点のみ補足しておきたい。

- ①足助の町並みの保存・活用は、地域での暮らしを継続する「未来」を作り出していく活動であり、伝建制度もその手段の一つ。観光もまたその手段や結果
- ②足助を含む山間部は、人口減少の影響を都市部よりも早くまた大きく受け、生活のあり方も問われている
- ③まちづくりには既存の枠組みの組み直しも含まれるが、その成果は関わる人や意識に左右される

おわりに

人口減少など先の見えにくい時代に向かい、足助の町並みでも保存と活用のバランスのとり方がより難題となる。その中で寿々家再生プロジェクトも、その時々のも最適解を探し続けていきたい。足助の町並みとともに注目していただければ幸いに思う。

地縁者と志縁者との協働による まちづくりの「場」の創出

藤澤 徹

1. 地縁と志縁によるまちづくり

那古野下町衆（以下那古衆）では①地縁者：従来からのコミュニティに属している個人・組織、②志縁者：地域外部に属し市民団体の活動が活発になるべくコミュニティに貢献する個人・組織としたうえで、①②が持つそれぞれの専門性を活かすまちづくりがスタートした。那古衆が発足して20年が経過した。これまでに、那古衆の動きを源流として、ナゴノダナバンクに代表される新しい団体も立ち上がっている。

2. 当日の議論

議論は「志援者」と「地縁者」の視点からテーマ別に発表した。

テーマ①：まちづくりのクッションとして

発表者：当該地区で最近出店した店主

長期的な視点に立った仲介者・第三者支援の立場としての那古衆の役割がとても大事であると感じている。まちづくりが進むかどうかは、関係者間の相互理解が必要である。那古衆は異なるステークホルダーの意見やニーズを調整する役割として機能している。新参物として地域に入った立場として、定例会議やイベントに参加することで、新たな繋がりや知識を持つことができた。

テーマ②：商店街と企業

発表者：地区内に所在する企業

商店街のまちづくり活動に対して中堅社員・若手社員が2年ごとに入れ替わりで参加している。商店街の伝統的な祭りや、新規のイベントに対して民間企業の専門分野を活かして協働を進めている。社員からは特にモノづくりの達成感を感じ、商店街のニーズを改めて感じる事ができている。活動は15年続いている。今後も那古衆を窓口として活動を継続していく。

テーマ③：商店街まちづくりとICT

発表者：ICT企業を退職後に商店街の顧問理事

「ICTを活用しての関係人口増加させる」。シニア

層が多く住む当該地区での難しい課題に向き合っている。これまでに大学との連携事業としてAIカメラで人流データ分析や、アプリ開発・普及に取り組んできた。経年的コミュニティ内でICTを浸透させていくには一筋縄にはいかないと実感している。最先端技術の実践と、弛まない住民との対話技術の二刀流が大切。

テーマ④：大学と商店街

発表者：名古屋工業大学都市基盤研究室の学生

20年前に那古衆がスタートしたときから、名古屋工業大学の都市基盤研究室（秀島栄三教授）が伴奏している。まちづくり現場で言われることとして、「学生は卒業するとまちから居なくなる」とあるが、当研究室はその概念を変えた。20年間、初歩的なまちづくり会議での議事録作成からイベント活動への人的支援、当地を題材とした研究まで幅広く伴奏を続けている。

①②③④をもとに那古衆の成果として発表をした。後半はポスターセッションとして個々の発表者が参加者らとテーマについて深めた。



3. 今後の那古野下町衆について

当該地区が直面している課題・テーマ、例えばシニアらが活用できる地域内交通や、関係人口増を目指すICT商店街、賑わい創出としての道路利活用等に対してのコーディネートを実践していく。まちづくりの担い手として、新たに当該地区に関わりたい・参加したい企業・個人らの受け入れ機関として機能していく。

現代の三大課題「脱炭素×防災・減災×地域の持続性」を解く！

岡 万樹子 加藤 孝明

株式会社日建設計総合研究所

東京大学
生産技術研究所

近年各地で脱炭素化が進む中、エネルギーインフラを担う企業がまちづくり現場で活躍する機会が増えています。本セッションでは、東邦ガス株式会社の今枝薫氏、株式会社関電工の黒田功氏、東芝エネルギーシステムズ株式会社の川上宏氏、東京大学生産技術研究所の野本健司氏より各プロジェクトを紹介いただき、新たな社会課題解決の可能性を共有しました。

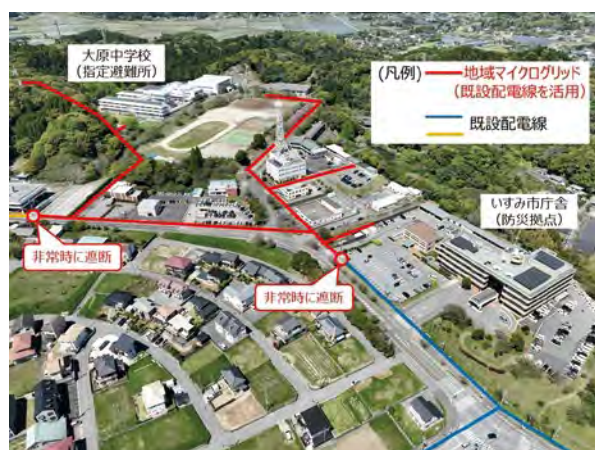
環境配慮型再開発みなとアクルスのまちづくり

名古屋市港区みなとアクルスは、東邦ガス旧港明工場跡地を再開発した環境配慮型低炭素モデル地区で、2022年に環境省脱炭素先行地域にも認定されました。自立分散型ガスコージェネレーションや再生可能エネルギーと連携したスマートエネルギーネットワークにより、エネルギー安定供給とコスト削減を実現。緑化推進により、ヒートアイランド現象の緩和や生活環境の向上を図っています。現在もエリアマネジメント活動により持続可能なまちづくりに取り組んでいます。

いすみ市地域マイクログリッド既成市街地強靱化

千葉県いすみ市では、2018年北海道胆振東部地震と2019年台風15号による大規模停電を契機に、系統線活用の地域マイクログリッドを導入し、災害時の電力供給確保と平常時の脱炭素化に取り組んでいます。

地域マイクログリッド：太陽光発電、蓄電池、LPガス発電機によるシステムを構築、2023年運転開始。本マイクログリッドのために系統線に接続できるLPガス発電機を開発。停電からのブラックスタートが可



系統線を活用したいすみ市地域マイクログリッド

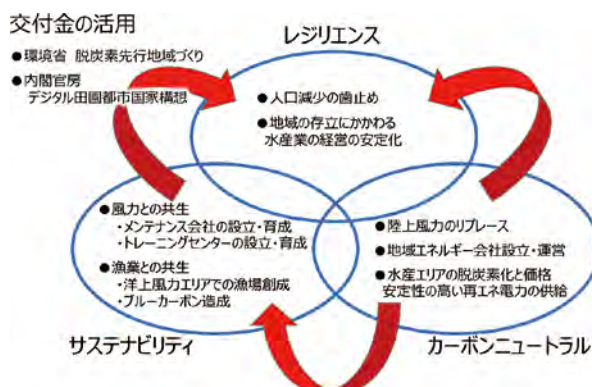
能となり災害時でも安定した電力供給を行います。

飛騨高山における地熱発電と温泉郷の共存

飛騨高山温泉郷では、地熱発電所を建設し、2022年に運転開始。地熱活用による温泉資源の持続可能な利用と観光資源の保護を実現し、地域住民との協力体制を確立しています。地熱発電所単独での運転機能を追加し、停電時に備えています。

銚子市の脱炭素を通じた地域活性化アプローチ

銚子では、急激な人口減少と地域経済の衰退に対処するため、脱炭素化をテコにした地域のエネルギー自給と経済活性化に取り組んでいます。銚子市は、風況が良く平地が多いため、陸上風力発電によるエネルギー自給のポテンシャルが高いエリアです。漁業との共生を目指し、ブルーカーボン造成を推進。地域エネルギー会社の設立や地域経済循環の仕組み構築を進め、地域内外の連携に取り組んでいます。



銚子地域力創発に向けたアプローチ



水辺のセッション「水辺の価値を再発見する ～ナゴヤの水辺の過去、現在、未来を語る会～」

井村 美里

水辺とまちの入口研究所共同代表

はじめに

当セッションは、水辺のこと、まちのことをもっと知りたい、楽しみたい、つながりたい、そんな想いをあと一歩進めるための知的探求の場として2017年12月に設立した、水辺とまちの入口研究所(以下「水まち研」という。)がこれまで取り組んできた、名古屋の水辺の調査や活動を報告、話題提供し、参加者と共に、都市と水辺の関係について議論を深めるものである。大阪からハートビートプラン・泉英明氏が飛び入り参加いただき、参加者からも各地の川の紹介があり、話題が弾む会となった。



当日の議論

はじめに、共同代表の秀島栄三(名古屋工業大学)から水まち研発足から現在までの活動、井村より名古屋の水辺に対する想い、広報部長の川口暢子(愛知工業大学)より水上の活動や堀川沿いの景観について紹介後、「水辺の価値を再発見する～ナゴヤの水辺の過去、現在、未来を語る会～」と題し、①ナゴヤの水辺の印象、②よりよい水辺の整備や水辺の活動を誘発する仕組み、③名古屋の水辺はどうすすむべきか。について、泉氏、参加者を交えた意見交換を行った。意見交換での意見や論点をいくつか紹介する。

①ナゴヤの水辺の印象

- ・水辺に生活感が残っている。護岸の石積みが目白。
- ・水上からしか見られない、川と陸のつながりがある。
- ・川に背を向けていないマンションがあてい。

- ・東京だとカヌーや台船など様々な水上利用があるが、実験クルーズとSUPしかない。
- ・水量があるのがうらやましい。
- ・対岸から見る護岸より川から見る護岸がいい。水上を行ける堀川には魅力的な価値がある。
- ・暗渠化されず水面が残っているのが良い。

②水辺の整備や水辺の活動を誘発する仕組み

- ・水面や水際の活動が増えたら、水辺に対する価値観が変わる。何かが浮かぶ堀川に。
- ・水運物流を復活し、沿川の価値を上げ、商売ができるようにする。
- ・いきなり水面に立つのはハードルが高い。この水辺よさそう！と感じられる沿川の土地活用、スポットがあるとよい。

③名古屋の水辺はどうすすむべきか

- ・生き物や川の様子など自然を見せて、環境面から堀川の大切さを主張する
- ・川沿い歩行者空間を盛り上げ、アクティビティと素晴らしい施設のセットがあるとよい。
- ・もっと産業で使われるとよい。

今後に向けて

これまで気づいていなかったナゴヤの水辺の魅力と不足している活動など新たな視座をいただくことができ、今後の活動につなげたい。最後は水まち研メンバーが、それぞれの夢を語り、最後まで参加下さった皆さんと楽しい集合写真を撮影して終了した。



学生たちが那古野で考えたこと

吉元 学

ワーク〇キューブ／愛知淑徳大学教授

職能から考える

私は建築の設計者であり、日頃は公益社団法人日本建築家協会で活動することが多い。失礼ながら、この度初めて「都市計画家協会」があり、「都市計画家」という職能があることを知った。ただ、前日の交流会にも参加させていただいて驚いたことは、その場に知り合いが大勢いたという事である。建築家と都市計画家はグラデーションの中にある職能であり、巨匠であるル・コルビュジェや丹下健三氏、黒川紀章氏は「建築家」であり「都市計画家」であったのだと思う。

住宅からまちなみを考える

那古野地区には多くの町家が残っている。会場となった伊藤家住宅はその代表格であり、この度の機会は学生たちに町家と街路の空間構成を身を持って体験して欲しいと考えて応募、参加させていただいた。日本ではまだまだデザインコードでまちなみを修景したり、壁面保存をもって、まちなみの整備に貢献したと言っているが、イタリアなどのヨーロッパではすでに数十年前から歴史的街路空間はそれを創り出している建築空間と表裏一体であり、建築空間を復元・整備することが、まちなみの保存・再生であり、言い換えれば、まちなみを保存・再生する事と、そこで市民が生き生きと暮らすことは同義語であった。これからの日本の都市計画も建築空間と一体となって考えられるべきであり、この問題は敷地の中で自らを制限し、思考している建築家の問題でもある。

学生の活躍の場として

今回の*愛知淑徳大学創造表現学部創造表現学科建築・インテリアデザイン専攻の学生たちが発表した内容は那古野地区を仮想敷地として2年生の3軒長屋、3年生の共同住宅、同じく3年生の店舗付き住宅の設計演習の課題の成果である。私事になるが那古野地区に住みだして8年になろうかとしている。何代にも亘ってこの地に住み続けている近隣の方からしたら8年間など、まだまだ新参者の部類であろう。そこで感じることは、まちづくりには熱心な行政関係者、専門

家、地元の方々が不可欠であるが、静かな普通の日常を送ることを望んでいる市民の方も大勢いるという事だ。多様な人々の集まるこのような場にプロによる非の打ち所の無い図面や絵を提示しても受け入れがたいのではないだろうか？ また白紙状態で意見を求められるのも戸惑うばかりであろう。そこで学生たちの突飛な、奇想天外な、非現実的なコンセプトをもつ幼い案が住民の方々のコミュニケーションツールにならないかとも考える。学生が社会で体験することだけが貴重なのではなく、学生しか出来ない実務への関与があるはずである。

※2025年度より愛知淑徳大学建築学部建築学科建築まちづくり専攻＋住居インテリアデザイン専攻に変更予定



新しい職能として

建築家の古谷誠章氏が「これからは街角のポストと同じだけ建築家が必要とされる」と発言されていた。半分冗談かもしれないが、これは巨匠の時代が終わり、まちに溶け込む新しい建築家像の模索の提案であった。布野修司氏の著書である「裸の建築家—タウンアーキテクト論序説」の中において、「タウンアーキテクトはまちづくり全般に関わる。従って「建築家」(建築士)である必要は必ずしもない」とある。今回の会議で新しいタイプの「タウンアーキテクト」(都市計画家)に何人かお会いできたことも今後の指針となった。市民に理解を得るためにも「建築家」「都市計画家」の新しい職能としての理解や法が整備されることが必要で、「タウンアーキテクト」などについて議論がなされ「建築・まちづくり基本法」が一日も早く制定されることが望まれる。

①堀川SUP(五条橋)ツアー

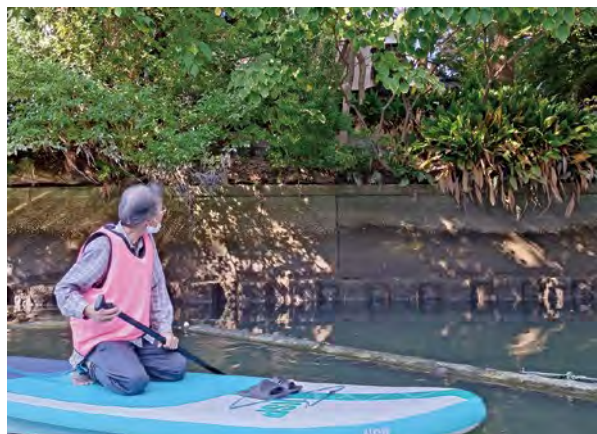
井村 美里

水辺とまちの入口ACT株式会社

全国まちづくり会議の会場となった円頓寺商店街の東にある五条橋から堀川に入り、SUPに乗って水上からまちを案内するツアーを実施した。



堀川は、1610年の名古屋城築城とともに開削された当時から、物流、舟運、まつり、花見などに使われ、人々にとって最も身近な暮らしと経済を支えてきた物流運河である。五条橋付近には、堀川舟運を利用した商家の伊藤家住宅があり、川側の庭には荷揚げしていた当時の土場などが残っている。大正6年架橋の中橋のしゃれた橋脚や、木材を荷揚げしていた遺構、様々な時代に積まれた石積み等もあり、船ではすーっと通り過ぎてしまう水際に残る堀川の魅力を、じっくりとSUPで、水上探訪を楽しんでいただいた。現在、堀川では急ピッチで護岸整備がすすんでおり、昔の様子を感じられる場所が徐々になくなっている。整備前の良いタイミングでの見学ツアーとなった。



②地域交流拠点「PALET.NU(パレット・ニュー)」視察ツアー～中川運河再生事業 社会実験～

寺西 功一

公益財団法人名古屋まちづくり公社

2024年9月6日にオープンしたPALET.NU(パレット・ニュー)は中川運河再生計画に基づき、中川運河の魅力向上、販い創出、交流・創造活動の促進のための社会実験施設として、名古屋市、名古屋港管理組合、名古屋まちづくり公社の3者によって運営されている。

中川運河は「東洋一の大河運河」として開削されてから90年が経過した。当初のモノづくりを支える産業のための運河から、賑わいや憩い、うるおいの水辺としての運河へ再生するために、現在、地域住民・企業、アーティスト、まちづくり団体、大学、行政機関など、さまざまな主体が中川運河を舞台にその魅力(水辺、アート、モノづくり)を活かすべく活動しており、その輪は広がりつつある。

この活動の輪がさらに大きな広がりとなり、中川運河の魅力をより多くの方が学び、体感し、そして自ら活動する場として、PALET.NUは期間限定で設けられている。

オープン以来、地域住民をはじめ多くの方に利用いただいており、マルシェ、ワークショップ、コンサート、共同菜園など幅広く活用されている。みんなの「やりたい」を実現するとともに地域主体のまちづくりに繋げるため、伴走支援を行っていく。

本ツアーでは、このような取り組みの目的や施設概要を説明するとともに、施設内や周辺の案内をした。それをふまえ、参加者からPALET.NUの活用方法についてアイデアをいただくなど、本社会実験と中川運河の可能性について語りあった。今後も多くの方に利用いただき、さまざまな可能性を探っていきたい。



③地方都市まちづくりの最前線！ 岡崎市・りたの歩みとQURUWA巡りツアー

天野 裕

岡崎まち育てセンター・りた

岡崎市の中心市街地における公民連携のまちづくり「QURUWA 戦略」では、「Q」の字の動線上に視認できる間隔（300m程度）で拠点施設を設定し、回遊性を高めることが意図されている。そうした拠点施設である籠田公園や中央緑道等の公共空間の再整備と共に、乙川河川緑地では「かわまちづくり」が、籠田公園周辺では「リノベーションまちづくり」が進められ、ここ数年でまちの景色が目覚ましく変わってきた。

本ツアーでは、QURUWA戦略の立案過程（2015年～）からコーディネーターを担った筆者がガイドを務め、同戦略の主要拠点を巡りながらこれまでの苦労や運営上の工夫などを伝えと共、QURUWA内外で約20年にわたってりたが関わった現場を紹介した。

りたの活動を前中後期の3期に分けると、前期は図書館交流プラザ・りぶらの参加型計画づくりと市民主体のソフトづくり等を通じてソーシャルキャピタルを醸成し、中期の松應寺横丁のまちづくりでは空き家を活用した地域の魅力向上と課題解決のノウハウを蓄積したことが、後期のQURUWAのまちづくりにつながっている。現在、QURUWAの経験から中心市街地だけでなく、岡崎市を横断する乙川の流域で営まれる農林業や自然環境、伝統的な文化や活動といった地域資源を多くの担い手と共に発掘・共有・活用することで、地域に根差したこの土地ならではのまちづくりが花開きつつある。今後の展開もご注目いただきたい。



④錦二丁目まちづくりの表と裏ーエリアマネジメントの現場から

名畑 恵

錦二丁目エリアマネジメント株式会社

名古屋市中区錦二丁目は名古屋駅と栄駅の中間に位置する。2万人が働き、近年のマンション開発で住む人も増えてきたためビジネス街から職住融合のまちに変化している最中にある。活動の特徴は、「錦二丁目まちづくり協議会」（2004年設立）を中心に地域主体で『錦二丁目長者町地区まちづくり構想2011-2030』（2011年発行）をつくり実践してきた点である。また近年では持続的なまちづくりの仕組みとしてエリアマネジメントの体制も構築してきている。

そこで、当日は再開発を契機としたまちづくり拠点や「都市の木質化」による歩道上の滞在施設、既存ビルのサブリースプロジェクト、公共空間整備利活用等、まちづくり構想を実現した現場を巡るまち歩きを行った。意見交換の会場は再開発で地区施設として創出された「会所」（広場）と路地を有するオリマチ錦のまちづくり拠点「喫茶／スペース七番」にて行われた。「会所」とは江戸時代からの碁盤割の名古屋城下の特徴で、街区中央に寺社仏閣等を有する共有地のことであり、人々の祈りや交流、情報が行き交う場であった。前述の構想では、伝統的な会所を大事にしつつ、ない場所については建替えや再開発の際に「現代版の会所と路地」をつくり、歩いて楽しいまちにすることを計画している。構想の実現としては一定の成果を得ている一方、活動が長期に及ぶ中、担い手の世代交代や主体性の希薄化などが起きており、全国の共通する課題として、参加者を交えた有意義な意見交換の場となった。



地域交流会～円頓寺商店街との連携

益尾 孝祐

JSURP 理事／全まち 2024 実行委員／愛知工業大学准教授

商店街と連携した全まち

全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤでは、まちを舞台に開催したが、その中でも最もまちを舞台にした取り組みが地域交流会である。地域交流会では、円頓寺商店街の既存の鉄骨フレームを活かしてリニューアルされた魅力的なアーケードの下、道路中心にテーブルを設置し、商店街の店舗と連携したオープンバル形式で開催した。

地域交流会実現までのプロセス

地域交流会を実現するまでのプロセスを以下に紹介したい。まず初めに、実行委員会幹事でもあり、円頓寺商店街界隈でのエリアリノベーションを推進されてこられてきたナゴノダナバンクの市原正人氏による紹介の元、地域交流会の企画を円頓寺商店街振興組合に提案させて頂いた。

地域交流会を実現するためにハードルとなったこととして、1) 道路中心部にテーブルを置いたイベントの実現、2) オープンバル方式の商店街連携型イベントの実現、3) テーブルなどのストリートファニチャーの準備の3つの課題があった。以下、これらの課題解決に向けた取り組みを紹介する。

道路中心部にテーブルを置いたイベントの実現

円頓寺商店街は「円頓寺商店街の奇跡」とも言われる、名古屋で最も有名な商店街再生を実現した商店街である。空き家や空き店舗のエリアリノベーションやアーケードのリニューアル、商店街のマネジメントが推進されている。円頓寺商店街では、七夕祭りやパリ祭、その他多くのイベントがアーケードを舞台に開催されているが、これまで道路中心にテーブルを設置したイベントは手続きが困難なことから実現してこなかった。そのため、地域交流会では、是非この課題を突破して欲しいとの声が寄せられた。

そのため、名古屋市ウォークアブル推進室との度重なる協議、警察協議を県土木事務所との協議など、関係者協議を重ねた。その際、道路使用許可を取得するためには、緊急車両や歩行者の通行幅を確保すること、緊急時に直ぐにテーブルを移動できること、イベント開催時の交通誘導に配慮することなどが課題となった。

これらの課題に対して、イベント時の道路断面図、道路平面図、簡易に撤去できるテーブルの開発、交通誘導の仕組みなどに関する協議検討を重ね、ようやく警察協議を突破した。



地域交流会での集合写真 写真：あいざわ



愛工大益尾研の学生によるテーブル製作

オープンバル方式の商店街連携型イベントの実現

オープンバル方式の商店街連携イベントとして、約120人規模のイベントを想定した。食事やドリンクは商店街の様々なお店からご提供頂ける仕組みとした。Peatixによる事前登録制とし、参加費は一人4,000円、2,000円食事券、2,000円のドリンク券で参加できる仕組みとした。

商店街振興会への挨拶後、この様なオープンバル方式のイベントを実現するため、商店街全体のお店に

参加可能かどうか挨拶回りをした後、参加表明を頂いた店舗に対して、追加で提供できる食事とドリンクの内容と量についてヒアリングを行った。その結果、食事は、お寿司、イタリアン、スペイン料理、沖縄料理、鉄板料理、惣菜、スイーツなど、ドリンクは、生ビール、日本酒、ワイン、焼酎、泡盛、ソフトドリンクなど、多種多様な料理とドリンクが楽しめるイベントが実現した。

テーブルなどのストリートファニチャーの準備

今回のイベントを実現するために、愛知工業大学益尾研究室では、円頓寺商店街での本イベントを通してプレイスメイキング支援として、大学での学生チャレンジプロジェクトに応募した。大学からの支援を受け、益尾研究室では、本イベントに対応できるテーブルを36脚製作した。また、オープンバルシステムとしてのイベントを実現するため、チケットデザイン、システムデザインを開発した。イベント後には、テーブルと共にこのイベントシステムを円頓寺商店街に寄付させて頂いた。

さいごに

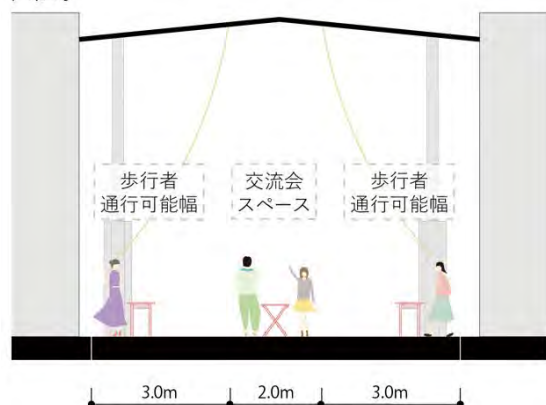
今回の地域交流会では、全国でも前例を見ない、道路中心部にロングテーブルを並べた、非常に印象に残るイベントの現実創造ができた。

これらの準備に関わり、ご指導頂いた市原正人様と共に、全てのイベントを支えてくれた益尾研究室の学生達に改めて感謝致します。



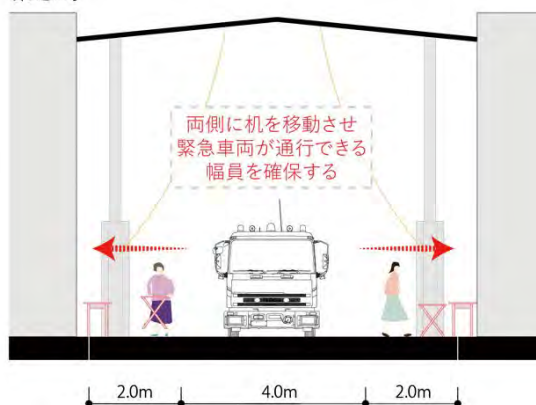
地域交流会に参加して頂いた店舗と多様なメニュー

平常時



警察協議に用いた交流会断面図

緊急時



全まちの様子 ～スナップ写真集～



円頓寺商店街での学生プレゼンテーション



オープニングセッション@なごのキャンパス体育館



エキスカーション（岡崎市）



地援者と志援者との協働によるまちづくりの「場」の創出@伊藤家住宅



エキスカーション@錦二丁目まちづくり



ナゴヤのまちづくりー地域主体のエリア再生
@なごのキャンパス体育館



物語のある美しい景観が育む郷土愛@ホームルーム



エキスカーション@堀川 SUP ツアー



地域交流会@円頓寺商店街



逃げ地図づくり体験 WS @円頓寺商店街

全国まちづくり会議 2025 in さいたまに向けて

鈴木 俊治

JSURP 理事／芝浦工業大学教授

みなさんこんにちは！ 全国まちづくり会議 2025 in さいたまの実行委員長を務めることになりました JSURP 理事の鈴木俊治です。来年度の全まち会議は私が勤務している芝浦工業大学大宮キャンパスで、10月18日～19日(土・日)に開催します。

「えっ、芝浦工大って大宮にあったのですか?!」という声が聞こえてきそうですが、50年以上前からこの地でがんばっております。

「埼玉には何もない」、「住民としての誇りがない」、「ダサイタマ〜」などとよく言われます。私はこれまでの人生で3/4程は埼玉県に住んでいますが、そう言われても怒らず確かにそうだな等と妙に納得してしまうようなところが、多くの県民にあると思います。地方出張に行って「あなたはどこから来たの?」と問われ、東京と答えたことも少なくなく(勤務地は東京としても)、別にそれは埼玉を卑下しているわけではなく埼玉と言ってもわかりにくいだろうから東京あたりと言っておこう、という気持ちがありました。

2019年公開の「翔んで埼玉」は埼玉をディスりまくった映画は、私を含めて埼玉では大受けて、それをひとつのきっかけに埼玉への意識が変わり始めたように思います。確かに埼玉には有名な観光地は少ないですが、それがどうした！住みやすい、災害は少ない、都会も自然もほどよい距離にあって生活はほぼ満たされている。すばらしいではないか！平凡かもしれないが日常生活を大切にすることこそ、まちづくりの本

質であるということに気付いた人も多いのではないのでしょうか。

そこで全まちさいたま 2025 では、ふたつのことを目指します。

ひとつは、まちづくり参加へのハードルを下げるということ。まちづくりというと一般の方々には大げさに聞こえるかもしれませんが、それぞれができることで参加して日常生活をちょっとよくする、大切なことを大切にして、ささやかでも暮らしの満足度を上げていくきっかけにしたいと思います。

もうひとつは全国のまちづくりに参加されている方々からさまざまな刺激を埼玉に与えていただき、「まちづくりってこんなこともできるのか!」、「こんな方法があったのか!」、「これなら自分でも出来そうだな」という気持ちを高めることです。ちょっとした勇気を持って参加する人がひとりでも増えてくれば、まちに対する愛着が増し、日々の生活を楽しみ、住み続けたいと思う人たちも増えるではないのでしょうか。このような、平凡と言われる埼玉だからできる「さいたま発ボトムアップ式まちづくりモデル」を発信したいと考えています。

現在、全まちさいたま 2025 にご参加、ご助力いただける皆さんを大募集しています。来年10月に緑豊かなさいたま・芝浦工大キャンパスで多くの皆様に笑顔でお会いできることを楽しみにしています！



メイン会場予定の芝浦工大大宮キャンパス2号館



皆さんをお迎えするキャンパス内の芝生広場 正面は図書館

福岡支部だより

牧 敦司

JSURP 常務理事・福岡支部事務局長／
株式会社醇建築まちづくり研究所

JSURP 福岡支部、2024 年後期のメインテーマは、「全国まちづくり会議へ行こう！」です。先ず、「全まちを知ろう！」次に「全まちに行こう！」です。

その為、お忙しい山本会長に何とかスケジュールを工面して頂き、7月26日（金）に福岡にお招きし、「全国まちづくり会議の歴史と『2024 全まち名古屋』の取り組み」をテーマに講演をお願いしました。支部参加者は一次会 20 名、二次会 18 名。「逃げ地図」の社会的意義を学んだ後の二次会では、会員外の参加も多く、福岡スタイルのお酒も入って喧喧譁譁、議論は翌朝迄延長する賑わいでした。

「全まちに行こう！」の呼びかけに応じて、若手の松尾会員と中堅の川端会員の名コンビが福岡支部から参加しました。

川端会員の貴重な体験報告から①楽しい雰囲気が作り出されており、多様なイベントには準備から大変なエネルギーがかかっているように感じ、JSURP の DNA を強く感じた。②ハードな都市再生や地域開発そのものの話ではなく、空間の利活用によるまちの再生などソフトな取組や実証実験・脱炭素・防災などの話題が中心で、家協会のメンバーの取組みがそのような傾向にある事が印象的。③紹介される事例の登壇者にコンサルタント業的な参加者は見受けられず、むしろ、担い手となっているプレイヤー主体であったことも、とても印象的。④九州・福岡においても、継続的な地域再生の担い手になっているような方々の話を聞いたり、メンバーとして招き入れる活動も進めては。等と熱い感想が寄せられました。

次は、「全まちを共有しよう！」と称した支部企画を予定しています。



北海道支部だより

近藤 洋介

JSURP 北海道支部長／株式会社日建設計

前回の支部だよりにて少し触れました、北海道支部の新たな活動を年末よりスタートしました。道内市町村は、全国を上回るスピードで人口減少が進展しています。加えて高齢化率は 32% 強、高いところでは 50% を超え、超高齢化社会にも突入しています。こうした中、まちづくり人材の不足も同様の状況にあり、かつ行政、研究者、民間プランナーのつながりが希薄なこともあり、それぞれの有する課題、ノウハウの共有・連携が図られてない実情にあります。

こうした担い手が各々抱える課題が打破されることなく、負のスパイラルに陥らないよう、また知の共有から北海道ならではのまちづくり方策を見出すべく、JSURP が各主体をつなぎ、連携を高める触媒となり、「北海道を課題先進地からまちづくり先進地へ」と称して多主体参加型の勉強会をスタートしました。

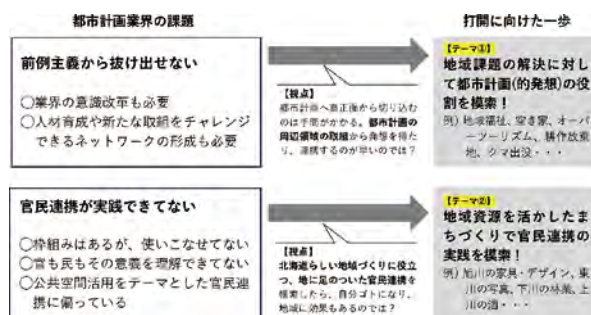
ここで JSURP 北海道支部が目指すものとして次の 3 つを設定しました。

一つ目として、JSURP をポータルとして、まちづくりに係る相談事を受け止め、ネットワークを活かして他主体とのマッチングを促す「相談機能」を獲得、充実させていくということ。

二つ目は、各々が有するスキル・ノウハウを共有する学びの場を提供する中で、まちづくりに関わる関係主体の「まちづくりリテラシーを高めたい」ということ。

三つ目には、若手の人材などが北海道札幌のまちの成長に貢献してきた先達から学ぶ機会を提供するとともに彼ら自身が今後の糧となるつながりをはぐくむ機会・場を提供しながら、これまで培われてきたネットワークとまちの蓄積を次世代につなぎたい、ということです。

まずは身近なプランナー、行政職員等からスタートし、当面の課題意識を共有したところですが、ここから、オープンな場として様々な人材を巻き込みながら、関係づくりと様々なトライアルを進めていきたいと思っています。



事務局 NEWS



■「全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤ」

「全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤ 特集」はいかがだったでしょうか。

初日10月12日(土)は晴天に恵まれ、暑さも感じられる陽気となりました。お天気が良かったからでしょうか、午後からのオープニング・セッションには地元名古屋の皆さまを始め各地から多くの方が関心を寄せられ、セッションIに180名、IIに160名の方が参加されました。夜には円頓寺商店街のアーケードの下、道路にテーブルを配置するというユニークな地域交流会が開催され、約200名の方が参加されました。2日目も好天となり、少し距離のある分散した会場でのセッションでしたが、合計で430名を超える多数の方々に参加されました。「全まち」に参加されました皆さまに、心より御礼申し上げます。

久しぶりの地方開催ということもあり、協賛いただいた企業・団体の皆さまはもちろん、特に円頓寺商店街の皆さまをはじめ、会場のスタッフの皆さま、様々な面でご助力いただいた「名古屋都市センター」の皆さまほか多くの方々にご協力を賜り、この場をお借りして感謝申し上げます。特に、各大学から受付他種々の業務に携わってくれた学生の皆さん、ありがとうございました。「全国まちづくり会議 2024 in ナゴヤ」に関わってくださった学生の皆さんの中から「まちづくり」に携わる方が一人でも多く与えられ、近い将来、JSURPと繋がってくださることを切に願っております。

■ 休眠預金等活用事業

JSURPでは現在、休眠預金等活用事業として、「外国人とともに暮らし支えあう地域社会の形成」、「沖縄版 誰もが暮らし支えあう地域社会の形成」、「黒島地区の住宅の安全確保と2次避難者の帰還支援」の3つの事業を行っています。特に沖縄、黒島地区(石川県)は遠方であり、事業を実りあるものとするに多く

の困難がありますが、携わるメンバーは現地に足繫く通うなど官民の様々な団体と協力しながら精力的な活動を行っており、現地の方々からも大きな信頼をいただけるようになってきています。

皆様におかれましてもぜひ関心を持っていただき、今後とも物心両面でご支援賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

■「逃げ地図士認定制度」

JSURPにおけるこの活動は、多様な災害からの「逃げ地図」づくりを通したリスクコミュニケーションとそれを起点にしたまちづくりの普及啓発とそれを担う「防災逃げ地図士」の人材育成を目的としています。昨年は逃げ地図士認定制度が立ち上がり、1級、2級、3級すべての登録が始まりました。現在、地方自治体をはじめとして地域の住民の方々の集まりや学校教育の場など、全国各地で逃げ地図体験会等のワークショップが開催されています。また昨年末には全国紙から取材を受けるなど、関心はますます高まっています。引き続き、「逃げ地図士認定制度」に注目していただき、可能な限り、防災逃げ地図士の登録に挑戦していただければ幸いに存じます。

■「JSURP 主催就職相談会」

まちづくりや都市計画の仕事に就きたいと考えている方を対象に、今年も2月22日(土)にJSURP主催の就職相談会を開催します。当日は会場に10社の都市プランナーに会場いただき、業界の概略を説明したのち、各社にプレゼンテーションを行ってもらい、様々な疑問や相談に対応する予定です。またオンラインでも同時中継を行う予定です。みなさまの周りでもまちづくりに興味を持ち仕事をしてみたいと考えておられる方がいらっしゃいましたら、ぜひお声がけをお願いします。開催の詳細は、JSURP事務局にお問い合わせください。

協会の動向 2024 年 10 月 1 日～12 月 31 日

<2024 年 10 月>

12～14 日 12～14 日 全国まちづくり会議2024 in ナゴヤ
23 日 第226回理事会

<2024 年 11 月>

18 日 J's Cafe Special—【上田孝明氏 & 小泉瑛一氏 クロストーク
～ローカルの力によるパブリックスペースの必要性とデザイン】
20 日 第227回理事会

<2024 年 12 月>

6 日 2023 年度沖縄版誰もが支え合い・働く社会の実現事業 協働研究 & 勉強会
18 日 第228回理事会
27 日 「JSURP 都市プランナーズビジョン 2024」公開

会員の動向 2024 年 10 月 1 日～12 月 31 日

★入会者 3 名 (賛助個人 2、学 1)

個人賛助会員：木本剛、LAOSUNTHARA AMPAN

学生会員：宮本誉史



Japan Society of Urban and Regional Planners
認定NPO法人日本都市計画家協会

[Planners ■ 都市計画家] 2025 年 3 月発行

編集● 認定NPO法人日本都市計画家協会 / Planners 編集長：海野芳幸

【編集委員】渡會清治 高鍋剛 千葉葉子 海野芳幸

制作● 認定NPO法人日本都市計画家協会 デザイン●地域まちづくり研究所

発行● 認定NPO法人日本都市計画家協会

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3丁目28番地5 axle御茶ノ水306号室
TEL 03-6811-7205 / FAX 03-6811-7206 / <https://www.jsurp.jp>

JSURP公式 Podcast 「みんなのまちづくりトーク」



Apple
Podcast



Podcast for
Amazon Music



Spotify

JSURP公式 SNS



Instagram



Facebook



X (Twitter)



note